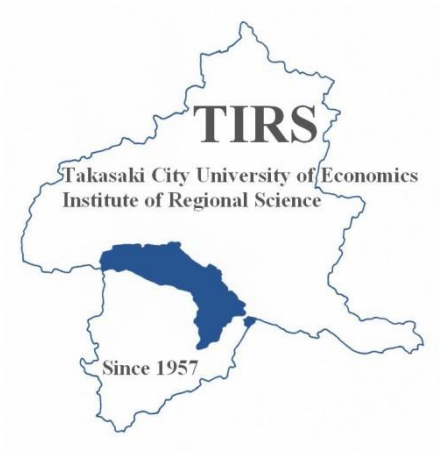


高崎経済大学地域科学研究所
ニューズレター　No.１５

目 次

所長挨拶 (1)
事業報告①　第３７回公開講座 (4)
事業報告②　第１４回公開講演会 (5)
事業報告③　２０２０年度地元学講座 (6)
事業報告④　２０２０年度地域めぐり (7)
事業報告⑤　第３回市民ゼミ (8)
プロジェクト研究報告 (13)
所員新刊紹介 (32)
研究プロジェクト新刊案内 (33)
地域科学研究所動静 (35)
編集後記 (36)

所長退任のごあいさつ－地域科学研究所基礎づくりの６年－

所長　　西野　寿章

2019 年 12 月に中国・武漢市で確認された新型コロナウイルスは，瞬く間に世界に拡散しました。依然として，新型コロナウイルス発生の原因や発生源は不明のままですが，世界の国々がコロナ禍に見舞われ，経済の停滞を招いて，大きな影響を与え続けていることは言うまでもありません。

高崎経済大学では，2020 年度の入学式を中止し，2020 年度の授業は GW 明けの 5 月 7 日から開始されましたが，授業は感染防止の観点からオンライン方式を取らざるを得ず，教員と学生は，コンピューターを介して接することになりました。新緑に覆われたキャンパスに学生はおらず，寂しさを通り越した複雑な思いをしました。

地域科学研究所の諸事業の実施については，３月 13 日に非常事態宣言が発出され，先の見通しが付きにくい状況であったことから，４月には市民，県民向け事業のすべてを一旦中止することといたしました。５月下旬になると新型コロナ感染者数は少なくなり，状況が変化したことから，諸事業の再開を検討し，７月末には，今年度の公開講座，公開講演会，地元学講座，地域めぐり，市民ゼミナールの講師，内容がほぼ決まり，大学ホームページ，広報高崎にて順次お知らせすることに至りました。

ただし，感染防止の観点から，参加者の３密を避け，安心して参加いただくための工夫が求められました。そのため，各事業の定員を通常の 1/2 としました。各事業には 1/2 とした定員を大きく上回っての申し込みをいただきました。厳正な抽選により参加者を決めさせていただき，その結果，多くの市民，県民の皆様にお断りすることとなったことは，誠に申し訳なく，お詫び申し上げます。参加者の方々には，マスクを着用いただき，間隔を空けてお座りいただくなど，通常とは異なる環境の中で受講いただきました。このように，例年より規模を縮小して，各種地域貢献事業を実施いたしましたが，滞りなく終了できましたことは，市民，県民の皆様方のご理解のおかげと感謝申し上げます。

コロナ禍の中，講師をお引き受けいただきました諸先生方，会場を提供いただきました高崎市中央公民館，高崎市北部公民館，地域めぐりでお世話になりました岡醤油醸造様，糀屋様，豊田園様，すかや様，大森院様，円性寺様の各位に感謝し，御礼申し上げます。

＊　　＊　　＊

一方，コロナ禍にあっても，研究は継続させねばなりません。地域科学研究所の前身の一つである産業研究所時代の 1979 年より，研究プロジェクトの成果を公刊してきました。地域科学研究所もこれを踏襲しています。2020 年度の研究成果の公刊は，旧高崎市内を貫流しています長野堰の通史です。

地域科学研究所が長野堰研究に着手した大きな動機は，第 1 には，伝承として伝わっている長野堰の開削時期，開削者について明確にすることができないのかという点にありました。第 2 には，長野堰の歴史に関する書物は『長野堰史』以降において刊行されておらず，開削時期から現代に至る長野堰の「通史」をまとめて，長野堰の歴史的役割を明確にしておくことが重要ではないかという点にありました。そして第 3 には，明らかになった長野堰の歴史を，これからの高崎市の地域づくりに活かせないかとの思いを強く持ったことにあります。第 3 の点については，高崎城下町として形成された中心市街地の再生に，長野堰の歴史を活かせないのかを模索しました。

2021 年 3 月には『農業用水と地域再生―高崎市・長野堰の事例』(日本経済評論社)として公刊されます。本学図書館，高崎市中央図書館，群馬県立図書館などにも配架されますので，ぜひご一読ください。なお，長野堰の明治以降の歩みを高崎経済大学ブックレット⑤としてまとめましたので，あわせてお読みいただけますと幸いです。

＊　　＊　　＊

私は，2015 年 4 月に設置されました地域科学研究所の所長を 3 期 6 年にわたって担当してまいりましたが，2021 年 3 月末をもって退任いたします。2008 年度から 2010 年度の 3 年間は，附属産業研究所長を務めましたので，通算で 9 年間に亘って，本学研究機関の運営に従事できたことは，たいへん光栄なことでありました。定年までの残り 2 年間も，引き続き，高崎市の諸問題の研究に取り組む所存です。

2015 年度は前身であります産業研究所と地域政策研究センターの継続事業を中心に展開しましたが，2016 年度からは地域科学研究所の独自事業を新たに考案し，高崎市が設置している公立大学として果たすべき地域貢献事業に取り組んでまいりました。大学の使命は，学生教育にあることは言うまでもありませんが，高崎経済大学は高崎市が設置した公立大学であることから，知の拠点として，大学の研究成果を地域へ還元することが求められています。地域科学研究所の活動は，その一つとして位置づけられます。

地域科学研究所のベースは，1957 年の本学設置と同時に設置されました産業研究所が続けてまいりましたプロジェクト研究です。プロジェクト研究の成果と所員が年 2 回発行される研究紀要「産業研究」に発表する研究論文が地域科学研究所のいわば知的財産です。毎年，10 月から 12 月にかけて行われます公開講座は，この知的財産を公開する場でもあり，産業研究所の取り組みを嚆矢としています。プロジェクト研究と公開講座は，本学研究所の伝統として地域科学研究所に引き継がれました。そして，長く高崎市民，群馬県民の生涯学習に資するために開設してきました公開講演会も引き続き実施してまいりました。

地域科学研究所のプロジェクト研究は，高崎市の地域経済，企業経営，まちづくり，歴史，文化などに焦点を当てて，研究を積み上げながら，高崎市の地域的特性を明らかにすることを目的としています。2016 年 3 月に刊行しました『地方製造業の展開―高崎ものづくり再発見―』(日本経済評論社)は，産業研究所の最終プロジェクトとして設置されました。研究のきっかけは，高崎経済大学附属高等学校が文部科学省のスーパーグローバルハイスクール(SGH)事業の採択校となり，高崎市内の企業がその推進にご協力いただいたことにありました。

高崎市の中心市街地は，高崎城の城下町，中山道高崎宿として発達し，明治以降も絹市場として栄えてきました。このことから高崎市は商都としての顔を持ってきましたが，戦後は企業誘致，工業団地造

成を積極的に行い，内陸工業都市としての顔も持つようになりました。『地方製造業の展開―高崎ものづくり再発見―』は，第１弾として個々の企業の創業から今日までの歩みについて，人材育成，技術革新などを盛り込みながらまとめました。高崎市製造業の特性は，各社が独自の技術を持つオンリーワン企業が集まっていることにあると言われており，研究を進めますと，そうした高崎市製造業の特性が浮かび上がってきました。1 社 1 社が特色ある技術を有し製品を作り続け，高崎市，日本，世界の発展に貢献しています。

現在，第 2 弾としまして海外進出を果たした 10 社の研究を進め，研究成果は 2021 年度中に公刊される予定です。10 社もまた特色ある固有技術を創造されてきました。2018 年度は中国，2019 年度はタイとベトナムへ出かけ，それぞれの企業の海外現場を勉強させていただきました。私たちは，高崎市の発展にご貢献いただいている企業の方々と接する中で，企業経営のご苦労と醍醐味を学ばせていただいています。研究を進めるに当たり高崎商工会議所，各企業様にご高配をいただきました。記して感謝申し上げます。高崎市の製造業研究は，高崎市商業の盛衰の研究とともに，高崎経済大学の地域貢献の一つとして，今後も継続していくべきテーマだと考えられます。

2016 年度からは空き家問題をテーマとして，先進事例調査などをふまえ，空き家政策のあり方について考察され，成果は『空き家問題の背景と対策－未利用不動産の有効活用－』(日本経済評論社刊)として 2019 年 3 月に公刊されました。この研究成果は，2019 年度から始まりました高崎中心市街地研究にも役立てられることになっています。

地域科学研究所では，これらに加え，市民，県民向け事業として大学での公開講座，高崎市中央公民館での連携公開講座，地元学講座，地域めぐり，市民ゼミナールを開設し，地域政策研究センターの自治体職員研修を引き継ぎ，自治体経営セミナーを開設しました。

地元学講座は，高崎市に埋もれている歴史や文化，市民生活を支えている社会資本や自然の現況を学んでいただく講座として構想しました。これまでに，観音山の自然，長野堰の歴史，小栗上野介の生涯，高崎五万石騒動の悲劇をテーマとし，講師，参加者とともに考えてきました。地域めぐりは，高崎市の自然，産業，歴史，文化などを学ぶため，現地に出かけるプログラムです。これまでに，高崎の水，高崎の企業，高崎の森，高崎の農業，高崎の老舗，高崎の伝統文化財などをテーマとして現地に出かけました。いずれも，住んでいながら，知らなかったという感想が多く聞かれました。加えて，少人数で市民のみなさまが学べる場として市民ゼミナールを開設しました。場所は，2020 年度はコロナ対策のため大学で行いましたが，本来は鞘モールにあり，本学学生が運営しているあすなろカフェ 2 階が会場です。美味しいコーヒーをいただきながらの勉強会は，たいへん好評のようです。

また自治体経営セミナーは，「これからの行政運営と地域づくり－地方分権的地域自治へのアプローチ」，「地方分権時代における地方公務員の使命と役割」，「人口減少時代の地域経営　－自治体プロフェッショナルのすすめ－」，「観光公害時代の地域政策を考える」をテーマとして開催し，自治体職員の研修として活用していただきました。

そして，2018 年度から地域科学研究所の研究成果をわかりやすく解説する高崎経済大学ブックレットの刊行を開始しました。2019 年 3 月には「高崎市の遊園地：カッパピアからケルナー広場へ」と空き家研究プロジェクト研究成果のダイジェスト版「空き家問題の背景と対策：未利用不動産の有効活用」の 2 冊が刊行され，2020 年 3 月には「地方における新しい働き方と働く場所」が刊行されました。2021 年 3 月には「高崎商業発達史―高崎中心市街地の形成と変容をふまえて―」と，長野堰研究プロジェクト成果の内，明治以降の長野堰の歩みを高崎市の発展過程とともにまとめた「明治以降の長野堰と高崎―これからの地域づくりへの視点を考

える―」との２冊が刊行されます。高崎経済大学ブックレットは，本学図書館１階の事務室と高崎市役所 1 階の市民情報センターにて無料で配布しております。ぜひご一読ください。

＊　　＊　　＊

本稿では，地域科学研究所の基礎づくりとしての 6 年間を振り返りました。十分とは言えないかも知れませんが，知の拠点として行うべき地域貢献事業が出揃ったように思っていますが，角度や視点を変えますと，まだまだやるべきこと，できることがあるようにも思っております。総じて，ご参加いただいた市民，県民のみなさまから好評をいただきました。参加いただきました方々から激励や感謝のお手紙をいただきました。誠にありがとうございました。

この 6 年間の基礎づくりを土台として，後任の所長がさらに地域科学研究所事業を充実させてくれるものと思っております。市民，県民のみなさまには，引き続き，地域科学研究所の諸事業にご参加いただき，生涯学習の場として活用していただければ幸いです。願わくは，学生諸君も地域科学研究所の諸事業に参加し，多様な年齢層の方々との交流を通じて見聞を広めてほしいと願っています。

事業報告①　第３７回公開講座

第 37 回公開講座は，感染症対策を万全にしたうえで定数を 1/2 にし、別掲のとおり実施しました。受講者 50 名の内，32 名が 7 回以上出席され，修了証が手渡されました。受講生の方々は，熱心に受講され，講師には質問を積極的にされていました。

《第 37 回公開講座》

①10 月 16 日（金）
　天羽　正継副所長（経済学部准教授）
　「日本の財政赤字―何が論点とされてきたのか」

②10 月 19 日（月）
　伊藤　宣広所員（経済学部教授）
　「経済危機と経済学～大恐慌、リーマン・ショック、コロナ・ショック～」

③10 月 29 日（木）
　加藤　健太所員（経済学部教授）
　「日本の近代化と渋沢栄一」

④11 月 4 日（水）
　小林　徹所員（経済学部准教授）
　「労働経済学が考える AI の雇用への影響」

⑤11 月 10 日（火）
　若林　隆久所員（地域政策学部准教授）
　「地方における新しい働き方と働く場所」

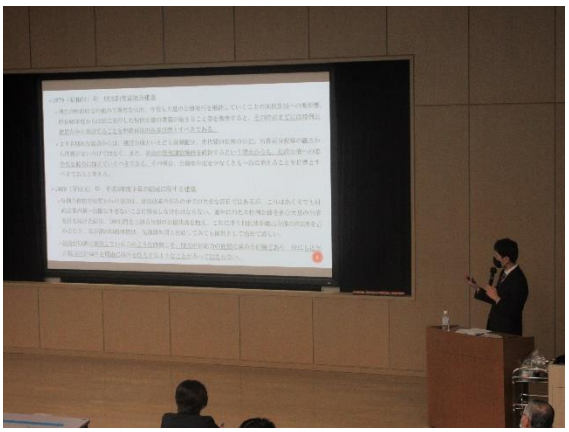
⑥11 月 19 日（木）
　安田　慎所員（地域政策学部准教授）
　「リスクの中のモビリティ－モルディブ観光から考える」

⑦11 月 26 日（木）
　唐澤　達之所員（経済学部教授）
　「ロンドンの歴史」

⑧12 月 3 日（木）
　中澤　芽衣特定研究員（特命助教）
　「同時代を生きるアフリカ女性－結婚・出生観を知る」

⑨12 月 8 日（火）
　山本　芳弘所員（経済学部教授）
　「再生可能エネルギー政策の展開」

⑩12 月 17 日（木）
　西野　寿章所長（地域政策学部教授）
　「エネルギー改革について考える－戦前・戦後の山村における内発的地域電化史をふまえて－」



＜講義の様子　講師：天羽　正継副所長＞

事業報告②　第１４回公開講演会

公開講演会は，感染症対策を万全にしたうえで,通常の２回開催を,1 回開催としました。

2020 年 10 月 24 日（土）に開催された第 14 回公開講演会は,COVID-19 感染拡大の影響もあり,例年のような本学教室ではなく高崎市立中央公民館・視聴覚教室にて行われました。今回は、世界遺産でもある総本山仁和寺（京都市右京区御室大内）より、唯一の寺院学芸員としてご活躍されている朝川美幸氏をお招きし,「宝物を守り伝えるということの意義―寺院学芸員の立場から考える―」と題してご講演いただきました。

寺院学芸員という一般的には聞きなじみのない職務・肩書ですが,平安時代から続く同寺の国宝・重要文化財を含む貴重な寺宝を護持し,次世代へと確実に継承させていく重要な役割を担うお仕事です。

当日は,そうした寺院学芸員の職務紹介の前に,そもそも総本山仁和寺とはどのような寺院であるのか,創建（888 年）から現在（2020 年）にいたるまでの歴史的な流れをご紹介いただきました。さらに同寺が属する真言宗についての概略もご説明いただきました（なお、真言宗にはさらに 18 派にわかれており,仁和寺は真言宗御室派の総本山であること,そして真言宗御室派は群馬県内にも北毛地域を中心に 6 寺院あることなどもご紹介いただきました）。

当然,市販されている旅行ガイドブックなどでも同寺の歴史は簡単に触れられてはいますが,そもそもなぜ同寺が多くの寺宝を所持し,また多くの参詣者が訪れるのか,そしてなぜ今に続いているか,といった基本的かつ重要な点については説明されないケースがほとんどです。そのため,今回改めて同寺の歴史や宗派における位置づけをご紹介・ご説明いただいたことで（もちろん、同寺の長い歴史を鑑みると本当に概略に過ぎないのでしょうが）,同寺の寺宝を守り伝えることの重大さと責務の重さをうかがい知ることができました。

さて,こうした概略をまずレクチャーいただいたうえで,いよいよ本題である寺院学芸員の具体的な業務のご説明をいただきました。

（寺院学芸員に限りませんが）学芸員とは文化財の「調査研究・収集・保存管理・展示・普及活動」を請け負う仕事です。このように定義にすると,限られた職務のように思われがちですが,「保存管理」だけでも湿度管理や防虫・防カビ,野生動物や自然災害による損壊の防止などが含まれ、365 日,常に気を遣わねばならないことがわかります。この点について朝川氏からはご自身の経験に基づき（ときに失敗談なども交えて）,どのように対処されているかを具体的にご説明くださいました。

なお,個人的に考えさせられたのは,寺宝（文化財）の「保存管理」と「展示（一般公開）」とのバランスをどう考えるべきか,ということです。仁和寺が所蔵している数万点におよぶ寺宝の中には,長い歳月を経た結果,どうしても傷んでしまったものも存在します。そうした寺宝は当然のことながら,なるべく安定した環境で護持し続ける必要がある訳ですが,一方で学芸員としてはそうした寺宝も含めて私たち一般市民に見てもらう,すなわち展示し公開する（場合によっては学術的な利用のために供する）ことも必要とされます。朝川氏からは,そのバランスが非常に難しく,しかし重要であるといった旨をお話いただきました。ここから「保存管理」と「公開」という学芸員として担うべき役割が,ときには相反しあうケースもあるのだと改めて気づかされた次第です。そして,広く公開・展示するためには,その寺宝（文化財）の歴史的価値や保存状況も研究調査し,寺宝（文化財）がどこまで公開に耐えられるか／耐えられないかを慎重に見極める必要があることを改めて認識することができました。

最後に「宝物を守るということ」と題して,近年,起きる大規模災害からどう寺宝を護るのかをご紹介いただきました。とくに東日本大震災後にボランティアとして被災地の文化財保護に携わった（そしていまも継続して携われている）ご経験談は大変貴

重なものと感じました。実は,朝川氏ご自身も福島県沿岸部のご出身であり,そうした地元で起きた災害に自身のスキルと経験とをどう活かして地元の役に立てるかを考える必要がある,ということで講演は締めくくられました。

この群馬県でも昨年夏に「群馬歴史資料継続ネットワーク」（通称：ぐんま史料ネット）が立ち上がり,県内の文化財や歴史資料の防災・保全・継承の方法について検討し,実践する取り組みが始まっております。こうした取り組みは今後もさらに必要となってくることでしょう。朝川氏ご自身が所属する総本山仁和寺だけでなく,地域の文化財の保護にも目を向けられることの重要性について,今回のご講演で学ばせていただきました。

末筆になりますが,改めて講師の朝川氏にこの場を借りて御礼申し上げたく思います。

本講演会は,本来であれば 2020 年の前期期間中に開催される予定でした。ただ,COVID-19 流行の関係で 1 年後に延期が決定したため,今年度の春先にはその旨を朝川氏にもお伝えしていました。しかし,COVID-19 の流行が（今考えれば一時的なものではありましたが）収まりつつあったことをうけ,やはり今年度の後期期間中に講演会を開催することが決定し,開催の運びとなった次第です。このように講演の予定が二転するなか,朝川氏にはそのつどご予定を調整していただき,最終的には「仁和寺霊宝館秋季名宝展」の会期中という大変ご多忙な折に高崎へお越しいただくこととなりました。本当にありがとうございました。

追記：なお,当日の講演会については,後日、仏教を中心とした宗教情報専門紙『仏教タイムス』（2020 年 11 月 5 日）に掲載されました。

鈴木耕太郎（地域政策学部講師）

<第 14 回公開講演会　朝川　美幸先生>

事業報告③　2020 年度地元学講座

22020 年は, 第二次世界大戦の終戦から 75 年の節目にあたります。群馬県は, 戦闘機を製作していた中島飛行機の工場が太田市や前橋市にあったことから, 大規模な空襲に見舞われました。高崎市も爆弾投下の被害を受けました。第二次世界大戦の悲劇を忘れてはならないとの視点から, 今年度は, 第二次世界大戦に関わる二つの講演をお願いすることとしました。

第 9 回地元学講座は, 10 月 26 日(月), 高崎経済大学の小池重喜名誉教授をお招きし, 「陸軍岩鼻火薬製造所の歴史」と題して, 高崎市中央公民館で開催されました。小池先生からは, 岩鼻町にあった陸軍岩鼻火薬製造所の設立経緯や運用についてお話をいただきました。岩鼻火薬製造所は, 東京の板橋火薬製造所に次ぐ, わが国 2 番目の陸軍火薬製造所として 1882(明治 15)年に設置されました。当初は, 東京砲兵工廠岩鼻火薬製造所と称しました。岩鼻町に火薬製造所が立地したのは, 輸送では利根川の水運が使えること, 製造に必要な水車を使用するのに適していたからでした。小池先生のお話によると, 岩鼻火薬製造所で製造されたダイナマイトは炭砿発掘のために使用されとのことでした。エネルギー資源に乏しい日本が, 自給可能な石炭生産のために炭砿開発を進めたわけですが, 開発に使用されたダイナマイトが高崎で製造されていたとは, 初めて

聞いた話でした。現在は，県民の森となっている岩鼻火薬製造所の歴史と役割について学びました。

第 10 回地元学講座は，11 月 16 日(月)，群馬県教育振興会専務理事・鈴木越夫先生を講師にお招きし，「堤ヶ岡飛行場と地元の人々による映画化－戦時下に生きた青少年を記録する」と題して，高崎市中央公民館で開催されました。旧群馬町の堤ヶ岡村に 160ha の飛行場があったことをどれだけの人がご存知だったでしょうか。現在も飛行場跡地には水田が広がり，名残を残しています。

長年にわたり高崎市の小中学校，群馬大学附属小学校，旧群馬町教育長を歴任された鈴木先生は，2006 年から 2010 年まで，かみつけの里博物館長をお務めになりました。館長時代に，地元の方から堤ヶ岡飛行場の話を聞く中で存在を知られ，記録に留めておく必要があると，精力的に聞き取り調査をされ，映画「陸軍前橋飛行場－私たちの村も戦場だった」を製作されました。終戦直後，米軍により二度と飛び立てないようにプロペラを外された戦闘機が堤ヶ岡飛行場に並んでいる写真が映し出され，敵に飛行機で突進していく特攻隊の悲劇は，二度と戦争を起こしてはならないとの思いを強く持ちました。

西野　寿章（地域政策学部教授）

<第９回地元学講座　小池　重喜先生>

<第１０回地元学講座　鈴木　越夫先生>

事業報告④　2020 年度地域めぐり

第 9 回地域めぐりは，第 5 回で開催し好評だったことから，再度「高崎の老舗」をテーマとして，開催されました。高崎市役所前で西野所長より，1985 年から 2020 年までの 35 年間における高崎中心市街地の町別世帯，人口の動向，1904(明治 37)年に刊行された『高崎繁昌記』に記録された 1903 年の高崎の商業集積についての解説を聞いた後，徒歩で常盤町の岡醤油醸造(1897(明治 30)年創業)，元紺屋町の糀屋(1563(永禄 6)年創業)，田町の豊田園(1865(慶応元)年創業)，宮元町スズランデパート内のすかや(1830(天保元)年創業)の 4 店舗を徒歩で巡りました。いずれの店舗も，長い歴史を有し，高崎の食文化，生活文化の向上に大きく寄与してきたと言えます。今回の地域めぐりの内容は，2021 年 3 月に高崎経済大学ブックレットとして公刊されます。関心をお持ちの方は，高崎経済大学図書館内，高崎市役所 1 階の市民情報センターにてお受け取りください。

第 10 回地域めぐりは，「高崎五万石騒動を見る新たな視点」と題して，群馬県地域文化研究協議会常任委員・和田健一氏を講師にお招きし，講義と五万石騒動ゆかりの地を巡って，理解を深めました。和田氏によると，五万石騒動への参加者は，畑作の割合の高い村々に多いことが判明したとのことでした。主に高崎台地上に立地していた高崎藩の古領

の村々は，八高二民の高率年貢に苦しめられてきました。五万石騒動は，騒動が発生した 1869(明治 2)年の凶作だけが要因ではなく，高率年貢に耐えかねた農民の思いが一気に噴き出したとも見ることができます。十分に解明されていないのは，なぜ，高崎藩古領は高率の年貢率が設定されていたのかという点で，今後の研究課題となっているとのことでした。参加者の方々から，地元に居ながら，地域の歴史を十分に知らず，こうした講座は，たいへん勉強になると言っておられました。当日の様子は，群馬テレビでも放送されました。

西野　寿章（地域政策学部教授）

<第９回地域めぐり　常磐町　岡醤油醸造>

<第 10 回地域めぐり　和田　健一先生>

事業報告⑤　第３回市民ゼミ報告

第 3 回市民ゼミは，感染症対策を万全にしたうえで,会場を Café あすなろから本学にしました。

①11/6『日本における宗教・信仰観を考える』

2020 年 11 月 6 日（金）18 時から,例年とは異なり本学構内 2 号館の 225 教室で市民ゼミを行った。テーマは「日本における宗教・信仰観を考える」。テキストとして伊藤聡『神道とは何か―神と仏の日本史』（中央公論新社（中公新書）,2012 年）を指定した。

今回のゼミでは,日本人がことさら「無宗教」と呼ばれる（ないし自認する）現状を鑑みて,本当にそうであるのか検証するとともに,そもそも日本において宗教とはどのような位置づけにあるかを考えてもらうことを目的とした。ただそのためには,現代における日本の宗教観・信仰観を追うだけでは不十分となる。むしろ,その根源にある問題を考えたとき,日本中世における信仰観こそが重要となってくる。今回テキストに指定した該当書は,日本中世における宗教（ないし信仰）の動向とそれらに対する人々の認識を知るうえで大変まとまっているものと考え,指定した次第である。

ただし,先に述べておくと,このタイトルで、また当該テキストを用いてゼミを行うのであれば,今回のような単発でのゼミでは厳しいものがあった。詳しくは後述するが,改めて参加してくださった 5 名の方にお詫び申し上げたい。以下,自身の設定ミスも赤裸々に告白することになるが、今後の市民ゼミをご担当される先生方の反面教師にしていただければ幸いである。

まず,受講生から声が上がったのが指定したテキストの妥当性についてである。曰く,大変ボリュームがあり,理解するのに時間がかかった、初学者向けのテキストだと思ったが違った、そもそもテーマを聞いて思い描いていたゼミの内容とテキストの内容とがかなり異なる,というものであった。確かに「日本における宗教・信仰観を考える」というタ

イトルで,日本中世の神道や仏教のことを学ぶというのは（短い内容説明を付していたとしても）,説明不足であった。また,該当書は新書ではあるが,大変情報量が多い書籍であることには間違いない。そのため,初学者向けというよりはややこの分野について事前に情報を仕入れている人向けであったことは否めない（なお、なかには該当テキストの内容に物足りなさを感じられた参加者もおられたようで、テキスト一つとっても選定が難しいことを痛感した）。当然,ここからどのような議論になるのか,どういった視点からこのテーマを論じることになるのか,といった点が問題となった。受講生の立場からすれば,テーマが先行して発表され,申し込んだ段階後にテキストを指定され,購入し,読み込むという順になるのでやや面食らうことになったのは必定であった。

こうした事態に直面し,テキストの内容に即したゼミというのは難しいことを理解したため,事前に想定していたゼミの進行計画を白紙に戻し,やや場当たり的ではあるが受講生のニーズに最大限添えるようにした。すなわち,最初に受講生にテキストでどこが一番不明だったかを聞き（これは事前に予告した通りの課題）,その上で,各自の疑問に答えつつもそこから新たな問題はないか,適宜,私が話を振りながら各自の考えや意見を述べてもらうようにした。必然的に私は司会進行とやや解説するだけの役割に回り,受講生同士の積極的な発言・討議に委ねる形となった。

結果的に,かなり司会進行がぎこちない部分もあったが（また時折、説明過多になってしまうこともあったが）受講生の熱意により,本質的な議論が深まることとなった。すなわち,日本においては「宗教」よりも「信仰」の側面が大きいのではないか,ということである。既存の「宗教」という枠組みは,当然,仏教にも神道にも当てはまるが,それが人々の間で共有されるとき,必ずしも「宗教の信者（信徒）」であるという自己認識は時代を経るごとに薄くなっているのではないか,しかし,漠然とした信仰心―それは、慣習とも言い換えることができるかもしれないもの―は今に残っているのではないか,という意見である。

ただ,惜しいことにここから議論を深めねばならない,という段階の手前でゼミの時間が終わることとなってしまった。

繰り返しになるが,今回はテーマ設定とテキストの選定とがうまく連携させることができなかった点については,受講生の皆様に改めてお詫び申し上げたい。それと同時に,積極的にご発言いただき,ゼミ運営を助けていただいたこと,こちらも改めて御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。

鈴木　耕太郎（地域政策学部講師）

<市民ゼミ・鈴木クラス>

②11/14 『日本近代の来し方と行く末を考える』

高崎経済大学着任から,はや 30 年。この間,私は何度か市民公開講座の講師を務めました。その時々の様々なテーマでお話ししましたが,熱心に受講される市民の皆さんを前にすると,毎回,気が引き締まりました。

今回は,一昨年から始まった「あすなろ市民ゼミ」の担当です。課題テキストを指定し,あらかじめ読了していただいたうえで,参加者とゼミナール形式で議論するというプログラムです。高崎経済大学の学生が運営する,まちなかの「Café あすなろ」で行うからこその「あすなろ市民ゼミ」なのですが,実際

の会場は,本学 2 号館 225 教室でした。COVID-19 がもたらした世界史的パンデミックは,市民講座の会場選定にも影響を与えたわけです。

私は,三谷太一郎『日本の近代とは何であったか―問題史的考察』（岩波新書、2017 年）をテキストに指定し,「日本近代の来し方と行く末を考える」というテーマを掲げ,ゼミに臨みました。市民向けの案内には「大河ドラマの歴史観ではとらえられない近代日本の到達点と行く末を展望します」と記しました。

本書は,「革命」のような「性急な能動性」「迅速な行動性」よりも,「静謐な受動性」「活性化された穏健性」に注目するウォルター・バジョットにならい,「議論による統治」を「近代」の指標に掲げて,日本の近代化を検証したものです。明治期から戦前まで,日本は「絶対君主」「戦争」「軍国主義」の色で塗りつぶされていたわけではありません。日本は確かに,欧米先進国のあとを追い,日本的な特性をもって「議論による統治」のシステムを築き上げようとしてきたのです。

著者の三谷氏は,「なぜ日本に政党政治が成立したのか」「なぜ日本に資本主義が形成されたのか」「日本はなぜ,いかにして植民地帝国となったのか」「日本の近代にとって天皇制とは何であったか」という４つの問題を設定し,近代化を分析しました。

日本の「来し方」を分析し,「行く末」を展望する三谷氏の結論的叙述は,次のようなものです。

「日本の近代は一面では極めて高い目的合理性をもっていましたが,他面では同じく極めて強い自己目的化したフィクションに基づく非合理性をもっていました。過去の戦争などにおいては,両者が直接に結びつく場合もありました。今日でも政治状況の変化によっては,そのような日本近代の歴史的先例が繰り返されないとは限りません。疑似宗教的な非合理性が儀式と神話を伴って再生し,それに奉仕する高度に技術的な合理性が相伴う可能性は残されています。」

どの国も,自国の近代化を「正義」「発展」「成功」の甘美な言葉で埋め尽くしたいのかもしれません。しかしながら,「議論による統治」という未完のプロセスを小綺麗に飾るのは,日本に限らず困難です。少なくとも私たちは,大河ドラマのように主人公の立身出世と成長になぞらえ,国家の歴史を美しいサクセスストーリーとして描く愚は避けるべきなのでしょう。

世界中で「自国第一主義」「単独行動主義」がはびこるなか,三谷氏は,デモクラシーにとっての平和の必要を知る「能動的な人民」による,国境を越えた「多様な国際共同体の組織化」に期待を寄せます。第一次世界大戦後,「国際関係の非軍事化」を目指し,不戦条約,軍縮条約として一部実現したものの,あえなく崩壊した「多国間秩序」の遺産を現代にどう引き継ぐかが重要とも指摘します。本書から学び取るべき重要なメッセージです。

市民の参加者予定者は 5 名。当日は 2 名の方が欠席され,受講者 3 名と私で「ゼミ」を進めました。皆さん,昨年還暦を迎えた私などより年長で,おひとりは 80 歳を超えていました。いろいろなお話しをしましたが,出席された 3 名の方々は,まさにご自分の人生を重ねながら本書に向き合われたのだとお見受けしました。

「あすなろ市民ゼミ」はまだ 3 年目ですが,地方公立大学が行う地域貢献の一環として、これからも継続すべきプログラムだと思います。ただし,新書レベルでも,ものによっては重厚な内容で,それをたった 1 日で議論し尽くすのは至難の業です。次年度以降は,1 冊の課題図書を,たとえば 2 回に分けて議論するスケジュールとしてはいかがでしょうか。

矢野　修一（経済部教授）

<市民ゼミ・矢野クラス>

③11/27『日本の人口減少・少子高齢化社会を考える』

コロナ禍の第 3 波が懸念される最中でしたが,当日は 2 名の皆様方にお集まり頂きました。まず,自己紹介を兼ねて,今回のゼミで指定した教科書（河合雅司（2017）『未来の年表―人口減少日本でこれから起きること―』講談社現代新書）の感想を述べて頂くことにしました。私も含めた全員の感想としては,前半部の今後想定される事態の解説こそ,人口減少・少子高齢化社会を考える上で,ひとつの材料になるものの,後半部の解決策の提示は,新奇性に乏しく再考の余地があるのではないかというものでした。本書を教科書に指定した理由には,活字となった文献や論文を批判的にとらえることで,新たな知見を得る大切さを共有する狙いがあったためです。さすが受講された皆様方は,事前学習に余念が無く,しっかりと教科書を読み込んでおられました。勉強に対する真摯な姿勢を本学の学生もぜひ見習ってもらいたいところです。

本書の中で例示されていますが,国立社会保障・人口問題研究所の推計値によれば,日本の総人口は 2010 年の約 1.27 億人から 2095 年にはほぼ半減の約 0.63 億人に減少すると見込まれております。もはや日本の人口減少・少子高齢化は避けがたい状況です。ただし,今後の経済成長と人口増減は,必ずしもパラレルな関係にはならないという議論になりました。いわゆる「人口減少悲観論」に懐疑的であるとの考え方には、大変興味深く感じました。

確かに「人口減少悲観論」の中には日本国内の労働力不足を主張するものが少なくありません。しかしながら,労働力とは技術革新が進むほど,低廉な業務から自動化されるので,むしろ労働力を必要としなくなります。このような業務では,労働力の絶対量が不足しているのではなく,むしろ求人側と求職者側のニーズが一致しないミスマッチングがしばしばみられます。

一方,低廉な業務を補填するために,低賃金で雇用できる外国人人材を積極的に受け入れようという議論がされております。しかしながら,低賃金で雇用できる外国人材を安易に受け入れてしまうと,近年,欧米各国で激化している社会の階層間対立を招く恐れがあり,外国人材の受け入れには,より慎重な検討が求められるでしょう。

人口減少・少子高齢化社会の中で,地域をいかに活性化していくべきなのでしょうか。ゼミの中で発言しましたが,地域活性化には,若年世代が地元に定住・定着することが肝要です。そのためにも地方圏により多様な雇用を創出する必要があります。コロナ禍によってリモートワークが一定の市民権を得ようとしております。いつでも,どこでも,誰とでも時間と距離を超えてコミュニケーションできる情報技術を活用すれば、地方圏における新たな雇用創出（裏を返せば東京一極集中の是正）につながるように思われます。人口減少によって空き家率の拡大も懸念されています。このような社会問題もまた,地元に定住・定着する次世代が存在してこそ,解決への糸口が見つかるのではないでしょうか？

人生の先輩方を目の前にして,私自身,いささか緊張しておりました。にもかかわらず,終始和やかな雰囲気でざっくばらんに意見交換できましたことは,ひとえに参加者の皆様方からの賜物に他なりません。依然としてコロナ禍の終息が見通せない状況でございます。当日参加された皆様方におかれましては,お身体に十分留意され,いつまでもお元気でお

過ごしになられますよう祈念しております。またの機会に,より多くの皆様方とお目にかかれますことを楽しみにしております。このたびは,貴重な機会をお与え下さり,誠にありがとうございました。

佐藤　英人（地域政策学部教授）

<市民ゼミ・佐藤クラス>

④12/10『宗教施設の観光資源化を考える』

群馬県において緊急事態宣言が発令された直後に開催された当市民ゼミナールは,やむなく辞退せざるを得なかった参加者の方々が多くいるなかで,受講生 1 名と 2 時間かけて,テキストの内容を踏まえて議論を行う形で開催された。

本ゼミのテキストとして利用した平山昇の『鉄道が変えた社寺参詣－初詣は鉄道とともに生まれ育った』（2012 年、交通新聞社）は,日本国内の宗教施設と近代観光の関係や,そのなかで展開された社会的心性を,関連資料を丹念に読み込んでいくなかで明らかにしてきた。その点で,本書は観光史や観光研究の研究史において極めて重要な書籍である。本書を基軸として,近年では観光史や観光研究においても,宗教施設が近代観光の発展に果たした役割が積極的に評価されるようになり,関連する研究が数多く生み出されている。本講座では,そうした議論を踏まえたうえで,宗教施設と観光の関係を議論してきた。

本市民ゼミナールでは,受講生とテキストの内容や研究史における意義を大まかに確認したうえで,鉄道に見られる交通網の発展が,宗教施設や宗教空間にもたらした社会的インパクトについて議論していった。特に,明治期以降の鉄道の発展が,神社仏閣における参拝の在り方や,神社仏閣へと至る門前町や宗教空間のあり方を大きく変容させる契機となってきた点を,全国各地の事例を取り上げながら議論をしていった。あるいは,そうした宗教空間の変容に対するさまざまな軋轢を取り上げながら,本テキストで論じられた変化に対して好意的な事例ばかりが進んでいった訳ではない点を確認していった。そのなかで,神社仏閣が観光資源としてのレジャー的要素をうまく取り込みながら,そのなかで戦略的に自らの信仰や宗教的側面を打ち出していく様子について,宗教の商品化をめぐる議論を援用しながら議論が展開された。そのうえで,時代の変遷を通じた宗教施設と近代観光の関係について、信仰とレジャーの観点から,その持続する側面と変化していった側面について,日本全国の具体的事例を交えながら話が進んでいった。

市民ゼミナール終了後のレポートにおいても,大阪・住吉大社における鉄道網の整備をまとめていくなかで,住吉大社の宗教景観や人々の行動・思考の在り方が変容してきた点が示されていた点で,非常に充実した市民ゼミであった。特に,平山昇が提示した実証研究を踏まえつつ,同様の事例が他の地域でも多く見られる一方で,地域固有の文脈のなかでさまざまな議論が展開されてきた点を示していた点で,本ゼミナールの議論が有益なものであった点を再確認することとなった。

最後に,本市民ゼミナールの内容からは離れるが,群馬県においても榛名山や赤城山,妙義山といった上毛三山や,水澤観音,白衣大観音をはじめ,明治期に鉄道網の発展によって近代観光と結びつく可能性を持った宗教施設は数多く存在してきた。これらの多くの宗教施設において,鉄道路線の敷設や交通網の整備,あるいはそれに付随する都市計画や地域デザインが持ち上がってきた点は,郷土史を丁寧に

紐解いていくと,断片的に資料が遺されている。そのなかには,実現した計画もあれば、実現しなかったものも多数ある。「歴史に『もしも』はない」と言われることも多いが,一連の宗教施設への鉄道敷設計画が実現していたら,群馬県内の観光や宗教施設の在り方は,現在のものとは異なった景観を描き出していた可能性は高い。

そうした部分に想いを馳せつつ,新型コロナウィルス収束後には,市民ゼミナールという形で,また改めて受講生との議論や,市民活動としての地域史や郷土史の掘り起こしを続けていきたいと感じる次第である。

安田　慎（地域政策学部准教授）

<市民ゼミ・安田クラス>

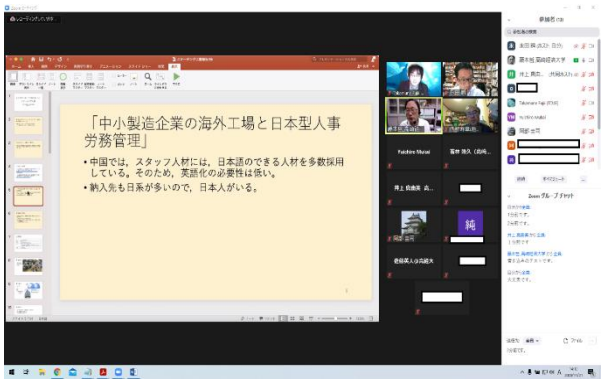
研究プロジェクト進捗状況報告

製造業プロジェクト

永田　瞬（経済学部准教授）

地域科学研究所の「地方都市における中小製造業の存立基盤に関する研究」プロジェクトは,2020 年 11 月 21 日（土）に公開研究会を行った。同プロジェクトは,2018 年度に調査研究を開始し,2018 年度には中国の香港,東莞,上海を,2019 年度には,ベトナムのハノイ,ホーチミンやタイを訪問した。2020 年度はプロジェクトの最終年度に当たる。今回は,中国進出・撤退企業を中心に事例内容を検討し,報告書の完成に向けた準備をすることを目的としている。報告者は,藤本哲,向井悠一朗,井上真由美,藤井孝宗,永田瞬,若林隆久の 6 名で、報告概要は次の通りである（敬称略）。

藤本報告では、リコイルスターターなどを製作するスターテング工業株式会社の国内事業展開と海外展開の具体例が紹介された。同社の中国の上海工場と東莞工場では,製品は同じであるが,労働者の定着率が違う。また,今後の需要として,アジア地域での農業製品,園芸製品などの展望もありうるとの議論があった（画像１）。

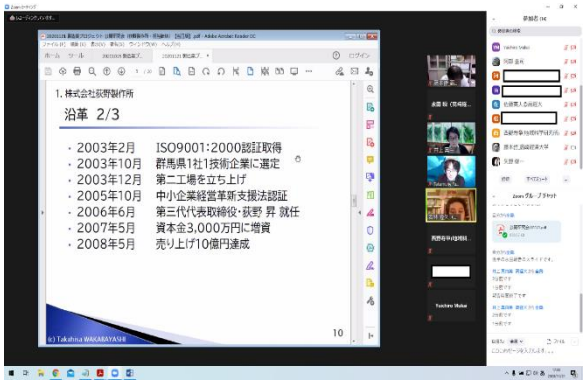


<画像１　藤本報告 スターテング工業株式会社>

向井報告では,自動車エンジン部品関係の製造を行う株式会社ヌカベの事例が紹介された。同社は国内では富士スバルの 1 次サプライヤーとなっているが,中国の珠海地域では,中国ローカルサプライヤーよりも、日系企業関係との取引が多い。生産性向上の取り組みや検査工程の機械化等の課題があることが報告された。

井上報告では,「グラフト重合法」というコア技術を元に,抗菌消臭関係の事業を手がける株式会社環境浄化研究所が紹介された。同社は須郷社長の研究コミュニティで,千葉大学教授などと連携し,製品化をはかる「研究所発ベンチャー」という位置づけである。同社の作った製品は他社と比べて,機能的な優位性が高く,それを実証することも可能であるとされた（画像 2）。

<画像２ 井上報告 株式会社環境浄化研究所>



<画像３ 若林報告 株式会社荻野製作所>

藤井報告では,中国経済の現状と日本経済が検討された。中国の GDP 成長率は,堅調に推移しており,消費活動は旺盛である。他方で人件費は高騰し,日系企業の現地法人の地域別撤退率も全地域の平均より高い。とはいえ,中国はすでに中間材や需要先,供給先として,グローバルバリューチェーンに組み込まれているため,日系企業が容易に撤退しえない状況も進んでいることが報告された。

永田報告では,鍛造・機械加工を手がける八木工業株式会社が紹介された。同社は 1914 年創業の 100 年企業である。農具関係の仕事から出発し,1960 年代以降に NSK やサンデンとの取引を強化し,自動車関係の仕事で躍進した。2000 年代は,中国とポーランドに進出しているが,海外拠点でも人材確保をめぐる競争がし烈化している。国内では,日本人労働者の中途採用の拡大や機械化,あるいは外国人技能実習生等の拡大を通じて,人材確保に努力している。

若林報告では,塑性加工品や鋳造品を手がける株式会社荻野製作所が紹介された。同社は自動車関係の仕事が多いが,半導体などそれ以外の事業もバランスよく手がけている。中国進出先で,商業地区化による立ち退き等もあったが,場所を変えて事務所を維持するなど,努力を行っているとの報告があった（画像 3）。

研究会には,プロジェクトメンバー以外に,群馬経済研究所,ぐんまみらい信用組合,荻野製作所,環境浄化研究所の関係者からの参加もあった。報告を通じて,活発な質疑応答と議論が展開され,高崎市の製造業が今後どのように発展していくのか,あるいは企業が蓄積する技術や技能の内容とその変化はいかなるものか,等を中心的に議論した（画像 4）。

<画像４ 質疑応答>

今回は研究会をはじめてオンライン ZOOM で開催したが、大きなトラブルなく運営できた。研究者以外にも企業関係者など当事者が参加することで,企業の歴史的発展や苦労に関する理解を深めることができた。今後も研究者,実務家,企業関係者が横断するこうした研究会を継続的に実施できることが望ましい。

プロジェクトでは今後,2021 年 2 月末に原稿を締め切り,報告書として出版準備に入る予定である。タイ・ベトナム調査については,原稿化したものをベースに,2 月上旬に公開研究会を実施予定であ

る。大学の関係者はもちろん,企業関係者も含む多くの関係者の参加を期待する。また,引き続き、製造業プロジェクトへのご助言やご支援をいただきますようお願い申し上げます。

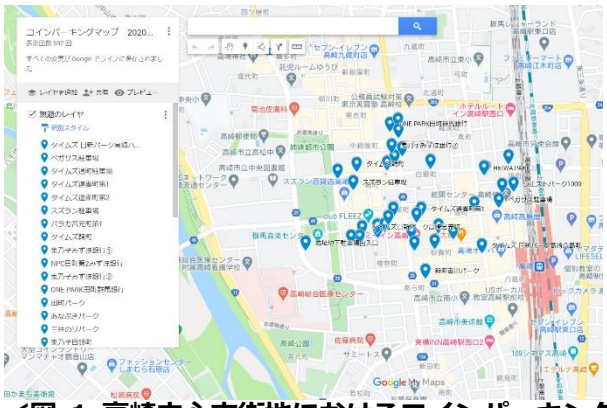
公開研究会の開催にあたっては,地域科学研究所の津田花織氏,所長の西野寿章教授に大変お世話になりました。感謝申し上げます。

中心市街地プロジェクト

阿部　圭司（経済学部教授）

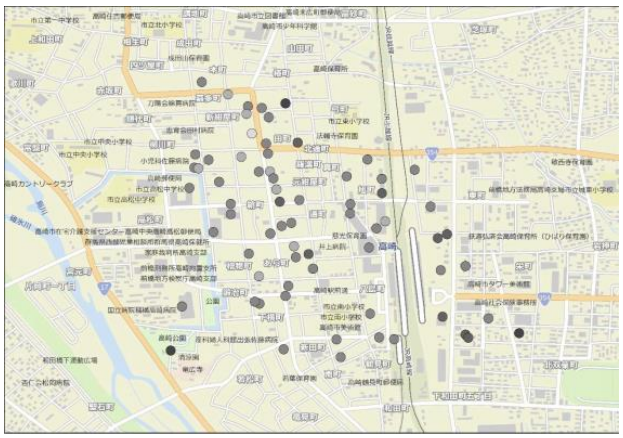
昨年度スタートした研究プロジェクト「地方都市中心市街地研究－人口減少時代におけるまちづくり－」では，昨年度末，国内の地方都市を複数訪問し，各都市の中心市街地問題とその対策、成果について調査する計画を立てていましたが，新型コロナウイルス流行のため，視察予定が延期となっています．本年度では国内事例の調査に加え、ドイツ、アメリカなど、コンパクトシティや都市経営における海外の先進事例を調査する予定でしたが，これも実施できていない状況となっています．多くの経済活動，社会活動，イベント等が中止となる状況では実地調査もままならず，プロジェクト参加メンバーはそれぞれが文献調査・研究を中心とした活動を行っています．その中からいくつかの調査・分析結果をご紹介したいと思います。

米本，太田の両所員は中心市街地における土地利用例として，コインパーキングの分布や料金を調査しています。太田所員はゼミの活動の一環として，2020 年現在の高崎駅西口のコインパーキングの分布図をオンラインマップ上で作成しました。さらに、過去に発行された住宅地図を活用して 2020 年時点でコインパーキングとして利用されている土地の 1990 年と 2003 年の土地利用を調査・比較し，その時系列的な変化を検討しました。その結果，およそ 20 年の期間で複数のビルや商店がコインパーキングへと転換したことがわかり，高崎駅西口においてコインパーキングや駐車場が虫食い状に展開していく様子が確認されたとしています。



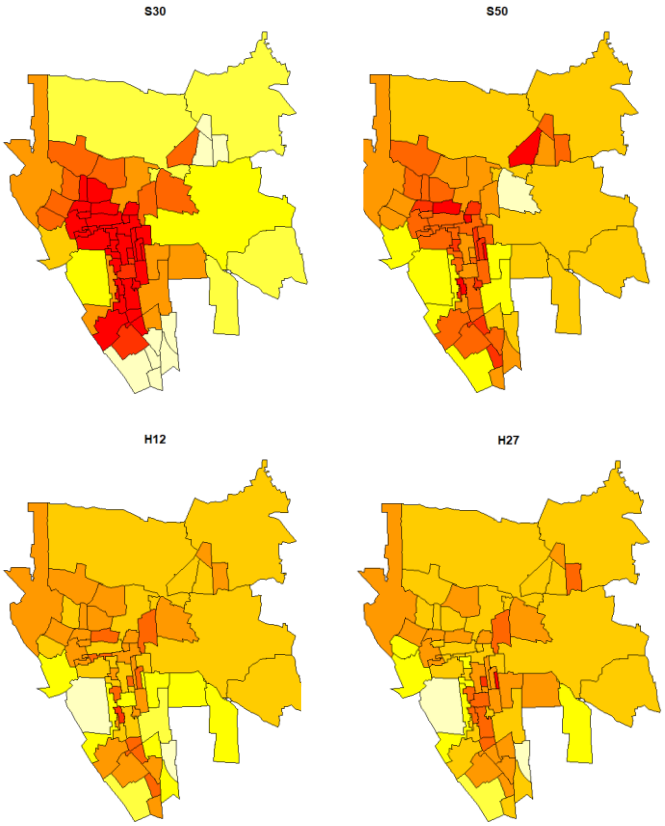
＜図 1 高崎中心市街地におけるコインパーキングの分布（2020 年現在）＞

米本所員はゼミ生と協力して 2014 年度頃から中央銀座や大手前慈光通りなど商店街の店舗の変遷や，中心市街地のコインパーキングの料金・利用状況などをまとめています。今回のプロジェクト開始を受けて，特に 2019 年度時点でコインパーキングの状況をアップデートするとともに地価との関係などに関して分析を行い，成果の一部を学会発表しました。分析結果からは，2016 年度からの３年間で田町・中央銀座や駅東口などで料金の上昇がみられ，ある程度中心部への回帰が進んでいることが推察される，としています。



＜図 2　昼間 8 時間当たりの駐車料金変化率（2016-19 年）＞　※上限時間を考慮

阿部所員は，高崎経済大学図書館や高崎市中央図書館が所蔵する「高崎市の統計」から，中心市街地とその周辺エリアの昭和 30～平成 27 年の期間に調査された計 13 年分の町丁別人口，世帯数データを採取し，平成 27 年時点での面積により人口密度を算出，これを地図にプロットする，という作業を行いました．作成した図から，昭和 30 年には中山道沿いに人口集中地区が観察され，中心市街地が形成されていること，中心市街地以外は人口密度が低いことが分かります。その後，郊外への市街地の拡大，中心市街地のスポンジ化が進み，平成 12～17 年頃がその傾向のボトムであったこと，平成 27 年時点ではわずかではありますが，人口が中心市街地に回帰している様子が観察されることを報告しています。



＜図 3 高崎市における昭和 30 年,50 年,平成 12 年,27 年の中心市街地とその周辺町丁の人口密度＞
※研究途中につき，一部データの欠落により正確でない部分もあります

小林所員は，法務局が所蔵している旧土地台帳の調査に取り組んでいます。現在は登記簿に代わられましたが，およそ昭和 30 年頃までの土地所有者の変遷を追うことができる史料です。同史料を用いて中心市街地における土地所有の歴史的変遷を抑えたのちに，土地登記簿を用いて現代までの土地所有の変遷を分析する予定です。これまでの分析では，高崎駅の東側は戦前農地が多いものの，農地以外の部分の多くを駅西側住民が所有しているケースを確認しています。町場に多くの地主が住んでいたことを示唆しているものと考えられます。西側の土地の所有者は東側と違い，近隣の住民が所有しているケース，ないしは所有と居住が一致するケースが多く観察されました。これらの調査を続けることで，高崎市中心市街地の基本的特性を描き出せるのでは期待しています。

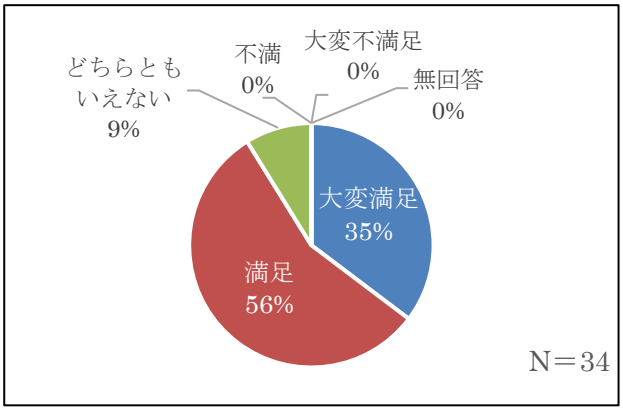
コロナウイルス流行の影響から，今年度，我々の研究活動は制限されてしまいましたが，その一方で，高崎市の中心市街地では今年度も複数のマンションが新たに着工，完成しており，中心市街地の風景は刻々とその姿を変えています。プロジェクトでは，中心市街地の隆盛を振り返ると共に，人口減少時代の今，地方中核都市，とりわけ高崎市に必要な中心市街地のあり方，あるべき姿というものをプロジェクトメンバーだけではなく，所員，あるいは行政や市民のみなさんと共に考え，研究成果としてまとめることができたら，と思っています。

《第３７回（2020 年度）公開講座》

○最終回（12/17）受講後，アンケート調査を実施。［有効回答数：34 人（回収率：100%）］

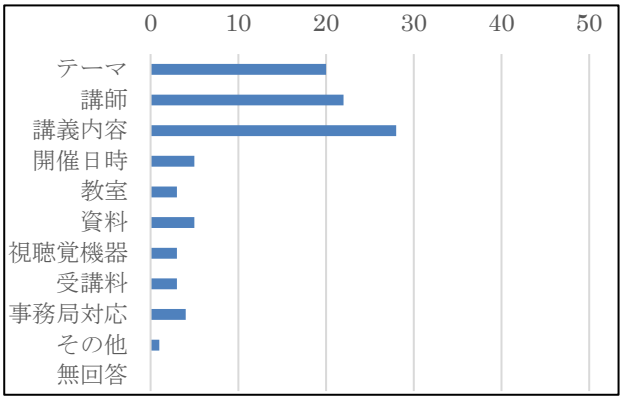
問 1．満足度

大変満足	12 人
満足	19 人
どちらともいえない	3 人
不満	0 人
大変不満足	0 人
無回答	0 人
合計	34 人



問 2．問 1 で「大変満足」「満足」と回答した方が評価する点（複数回答可）や講師に向けての感想（自由記入）　(抜粋)

テーマ	20 人
講師	22 人
講義内容	28 人
開催日時	5 人
教室	3 人
資料	5 人
視聴覚機器	3 人
受講料	3 人
事務局対応	4 人
その他	1 人
無回答	0 人



・生活に切っても切れないエネルギーに対して過去の事業体の取組みが,現在にも通用出来るのではと思えた。

・歴史に沿った話で興味深かった。

・テーマが多岐に渡るのが面白かったです。

・足元から役立つ社会のための発想が必要なのだと痛感。

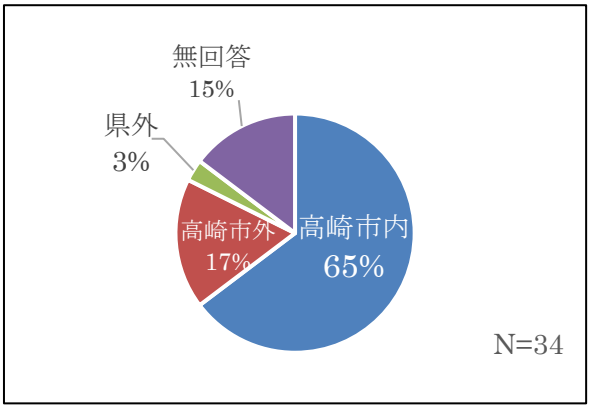
・経済大学らしい分野（国債や再生エネルギー）の講義は特に良かったと思います。

問 3. 問 1 で「どちらともいえない」「不満」「大変不満」と回答した方が指摘される点
（自由記入）　(抜粋)

・話しは聞きやすかったが,個人的には興味薄いテーマだった。

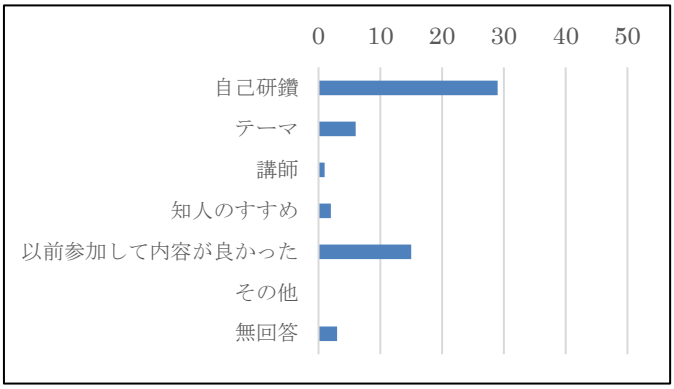
問 4.　通学・通勤・所属先の地域

高崎市内	22 人
高崎市外	6 人
県外	1 人
無回答	5 人
合計	34 人



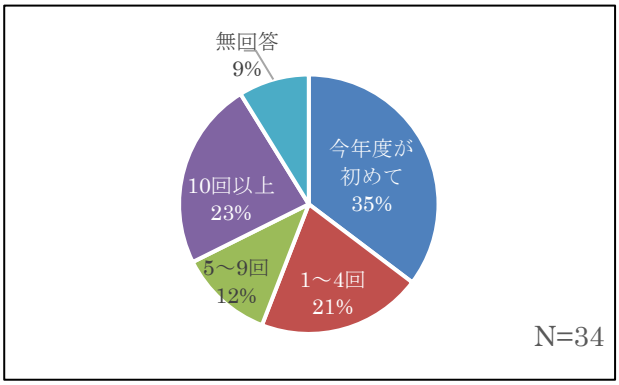
問 5. 受講の理由(複数回答可)

自己研鑽	29 人
テーマ	6 人
講師	1 人
知人に勧められた	2 人
以前参加して内容がよかった	15 人
その他	0 人
無回答	3 人



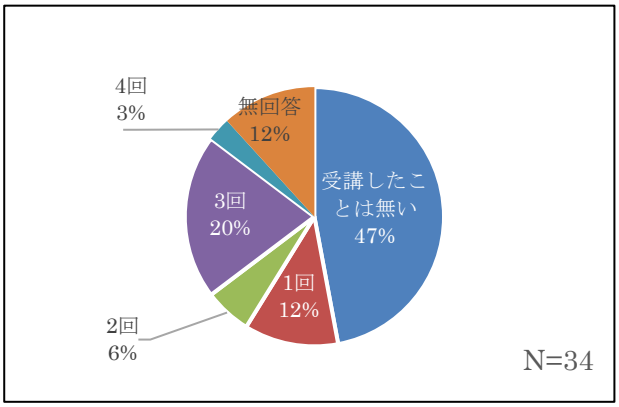
問 6. 昨年度までの受講回数（連携公開講座も含む）

今年度が初めて	12 人
1～4 回	7 人
5～9 回	4 人
10 回以上	8 人
無回答	3 人
合計	34 人



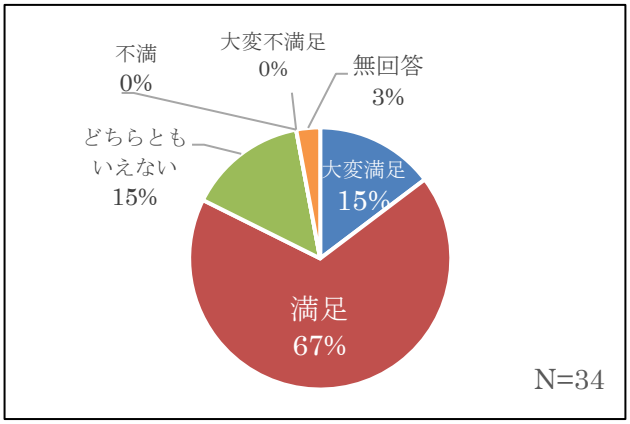
問 7．春季連携公開講座の受講回数

受講したことはない	16 人
1 回	4 人
2 回	2 人
3 回	7 人
4 回	1 人
無回答	4 人
合計	34 人



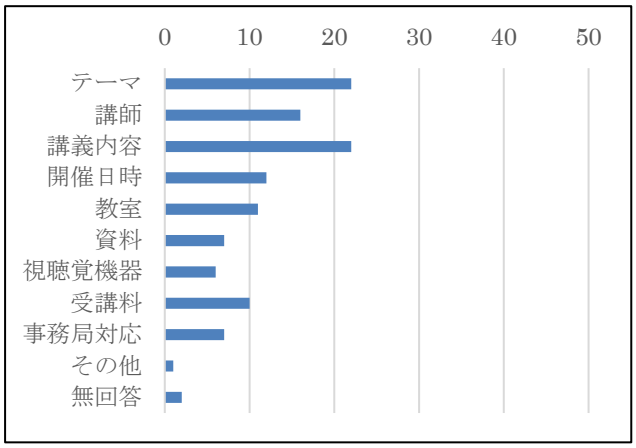
問 8．今回講座の全体的な満足度

大変満足	5 人
満足	23 人
どちらともいえない	5 人
不満	0 人
大変不満足	0 人
無回答	1 人
合計	34 人



問９．問８で「大変満足」「満足」と回答した方が評価する点（複数回答可）

テーマ	22 人
講師	16 人
講義内容	22 人
開催日時	12 人
教室	11 人
資料	7 人
視聴覚機器	6 人
受講料	10 人
事務局対応	7 人
その他	1 人
無回答	2 人

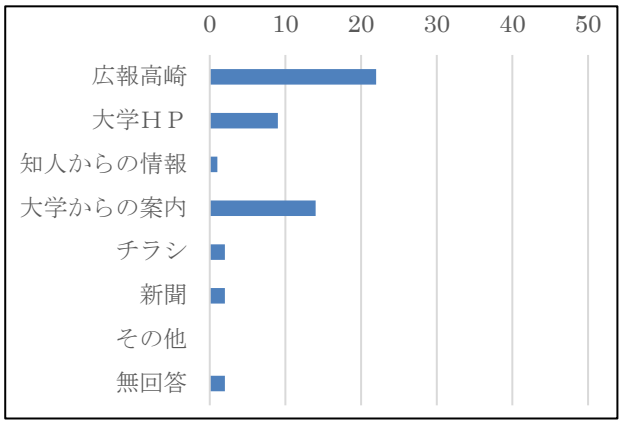


問１０．　問８で「どちらともいえない」「不満」「大変不満」と回答した方が挙げた改善すべき点（複数回答可）（抜粋）

・講義という形ではなくディスカッションの様な双方向の議論ができればと思います。
・今回は女性講師が少なくて残念でした。
・資料については大いに改善の余地があると思います。
・「大学の研究者」の視点で普段の情報番組などと違った視点からの知見を語って欲しい。
・質問用紙による質問は,質問の真意の表現及び受け止めが困難のような気がしました。
・歴史に沿った経済学なり,地域社会学,政治学等を考えていただければ良いと思います。

問１１．本講座をお知りになったきっかけ（複数回答可）

広報高崎	22 人
大学ホームページ	9 人
知人からの情報	1 人
大学からの案内	14 人
チラシ	2 人
新聞	2 人
その他	0 人
無回答	2 人



自由記述欄（取り上げてほしいテーマ・分野，事務局へのご要望・お気づきの点など）（抜粋）

・事務局の皆様,コロナの中お疲れさまでした。これから受験シーズンに入り多くの人に対応することに気の抜けない日々も続きます。例年もそうですが,今年はさらに大変かと思います。お体に気をつけて 2021 年度をお迎えください。
・毎回,コロナ感染感染リスクの中でありながらも安心して受講出来た事に,スタッフ,講師の皆様に感謝します。
・「コロナ禍と経済について」世界の対策と日本の対策について,どんな点が日本は遅れたのか。政府の対応は適切だったのか？先生方のお話を聞きたいです。
・企業の現状,コロナの状況からどう移っていくのか興味がある。その点の講義を聞きたい。
・地球環境への投資ビジネスの拡大が今後の世界に必要と思います。このあたりを学びたいです。
・マーケティングについてのテーマアップを要望したい。
・最終講義に近い日程は 11 月中には終了するような「日程」を組んでもらいたい。

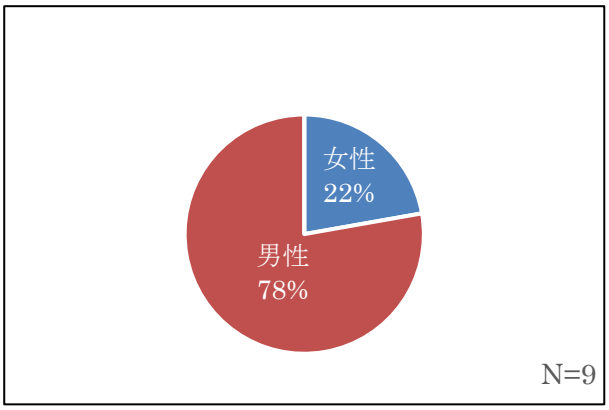
《第９回 地域めぐり「高崎市の老舗をめぐる」》

○講座終了時にアンケート調査を実施。［有効回答数９人（回収率：100.00%）］

問 1．ご自身についてお答えください。

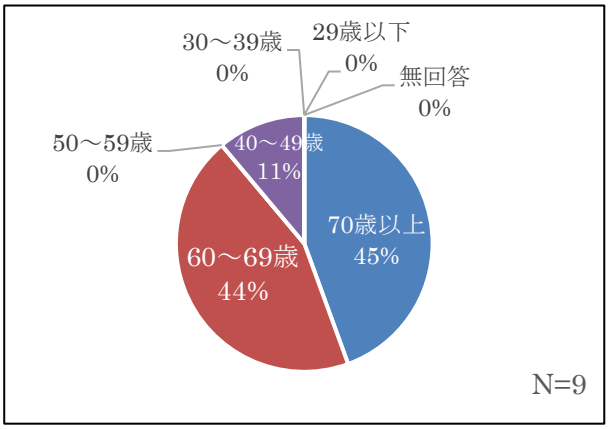
【性別】

女性	2 人
男性	7 人
合計	9 人



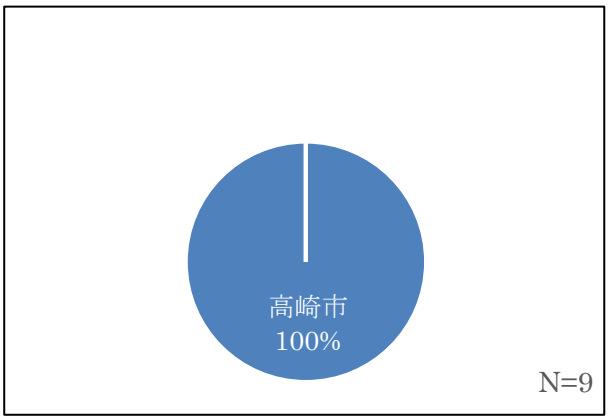
【年齢】

70 歳以上	4 人
60～69 歳	4 人
50～59 歳	0 人
40～49 歳	1 人
30～39 歳	0 人
29 歳以下	0 人
無回答	0 人
合計	9 人



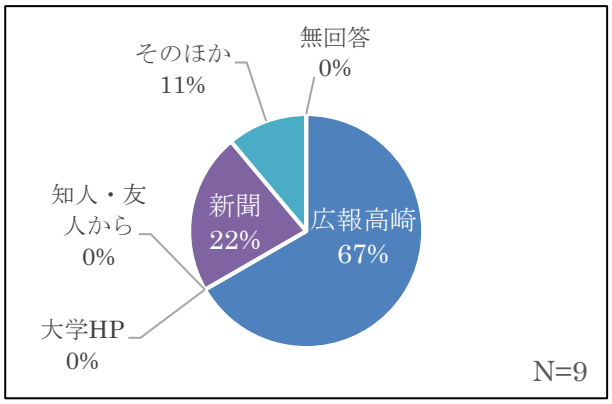
【お住まい】

高崎市	9 人
高崎市吉井町	0 人
高崎市新町	0 人
旧群馬町	0 人
高崎市箕郷町	0 人
旧榛名町	2 人
上記以外	0 人
無回答	0 人
合計	9 人



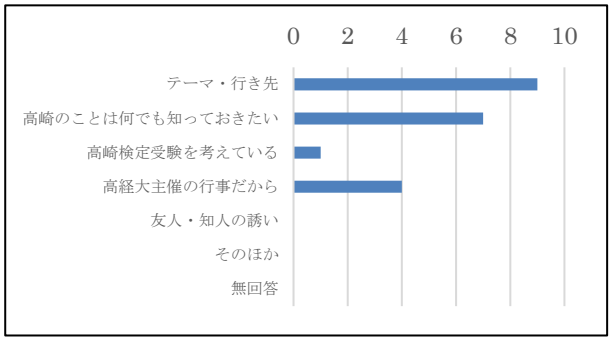
問 2．本企画をどこでお知りになりましたか

広報高崎	6 人
大学のホームページ	0 人
知人・友人から	0 人
そのほか	2 人
無回答	1 人
合計	9 人



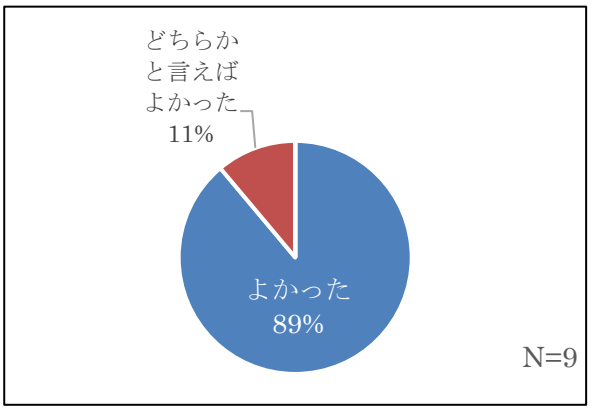
問 3．参加された動機をお聞かせください。(複数回答可)

テーマ，行先に関心があった	9 人
高崎のことは何でも知っておきたい	7 人
高崎学検定の受験をえている	1 人
高崎経済大学が主催する行事だから	4 人
友人・知人に誘われたから	0 人
そのほか	0 人
無回答	0 人



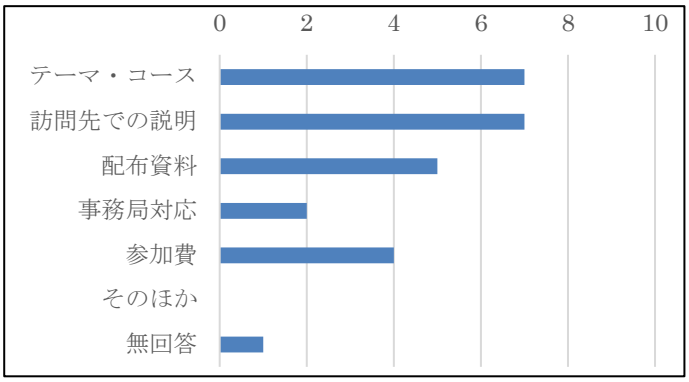
問 4．参加された感想をお聞かせください。

よかった	8 人
どちらかと言えばよかった	1 人
どちらとも言えない	0 人
どちらかと言えばよくなかった	0 人
よくなかった	0 人
無回答	0 人
合計	9 人



問 5．問 4 の質問において「よかった」「どちらかと言えばよかった」と回答した方のよかった点。(複数回答可)

テーマ・コース	7 人
訪問先での説明	7 人
配付資料	5 人
事務局対応	2 人
参加費	4 人
そのほか	0 人
無回答	1 人



【ご意見】（抜粋）

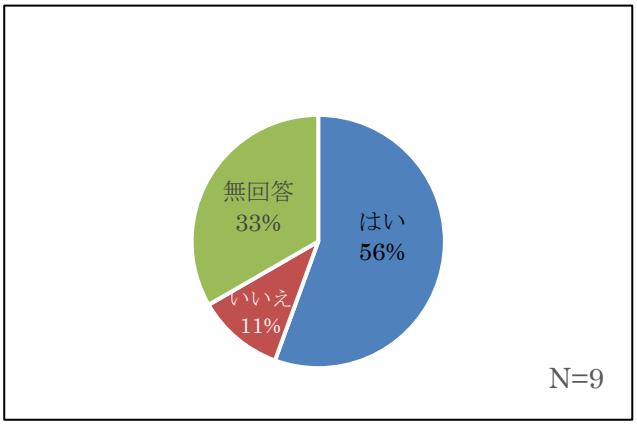
・勉強になりました。ありがとうございました。
・地元の新たな知識を得た。
・今回も歩きながらの町歩きもよかったです。豊田園さんの 2 階の拝見は良かったです。
・高崎の歴史を老舗より見るということで,視点が変われば見るものも違って見える。
・町民の歴史が解りました。100 年企業が沢山あり驚いた。

問 6．問 4 の質問において「どちらかと言えばよくなかった」　「よくなかった」と回答した方のよくなかった点。

アンケート回答なし

問 7．地域めぐりに，また参加したいと思われますか。

は　い	5 人
いいえ	1 人
無回答	3 人
合計	9 人



※どのようなテーマやコースの地域めぐりに参加したいですか。
　ご希望があれば教えてください（抜粋）

・史蹟,旧街道蹟など。
・高崎の歴史を知る。特に今回のような「おまち」のエリアの歴史を知りたいです。
・お寺参り，食事巡り（お菓子 etc)
・山,川等めぐり
・高崎の歴史を歩きながら感じられるのは大変良いと思います。

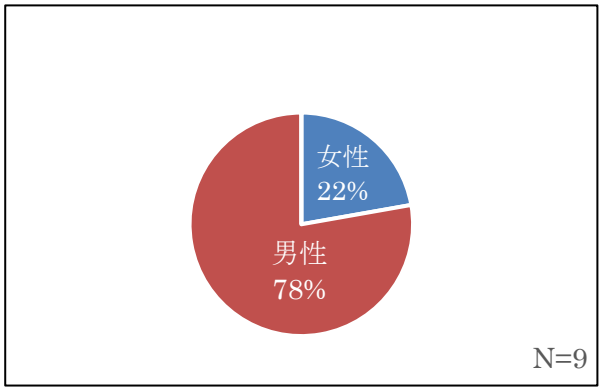
《第 10 回 地域めぐり「高崎五万石騒動の地域をめぐる」》

○講座終了時にアンケート調査を実施。［有効回答数：9 人（回収率：90.00%）］

問 1．ご自身についてお答えください。

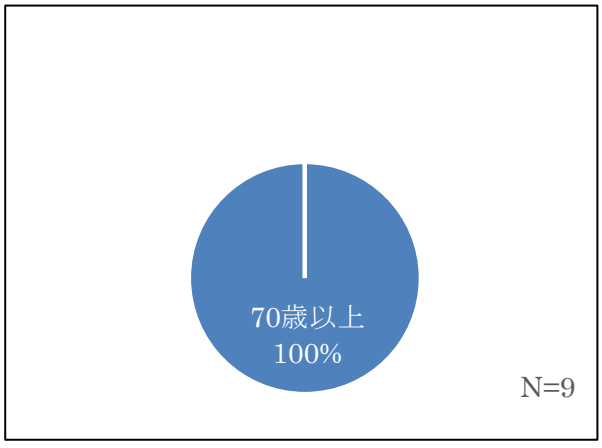
【性別】

女性	2 人
男性	7 人
合計	9 人



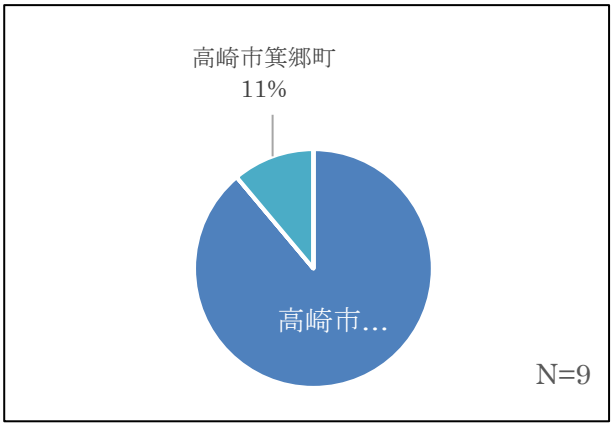
【年齢】

70 歳以上	9 人
60～69 歳	0 人
50～59 歳	0 人
40～49 歳	0 人
30～39 歳	0 人
29 歳以下	0 人
合計	9 人



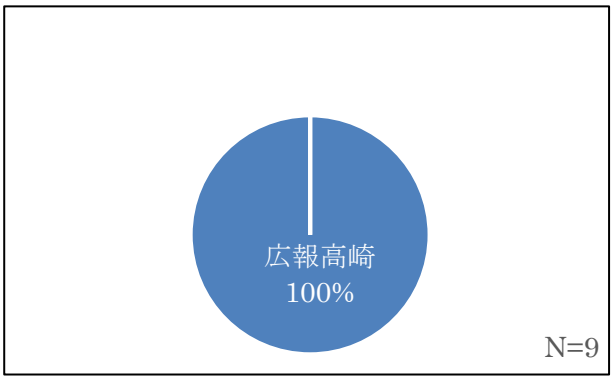
【お住まい】

高崎市	8 人
高崎市吉井町	0 人
高崎市新町	0 人
旧群馬町	0 人
高崎市箕郷町	1 人
旧榛名町	0 人
上記以外	0 人
無回答	1 人
合計	9 人



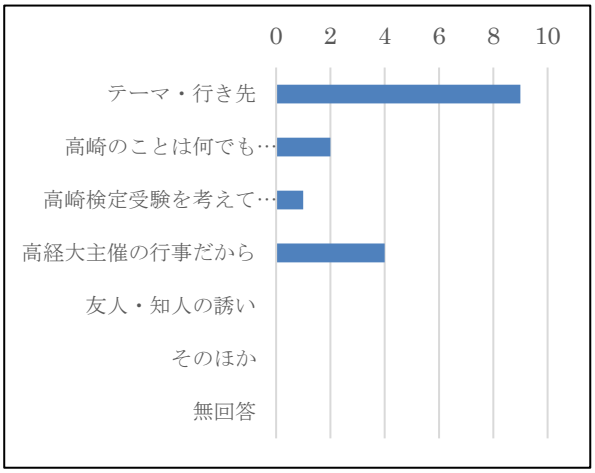
問 2．本企画をどこでお知りになりましたか

広報高崎	9 人
大学のホームページ	0 人
知人・友人から	0 人
そのほか	0 人
無回答	0 人
合計	9 人



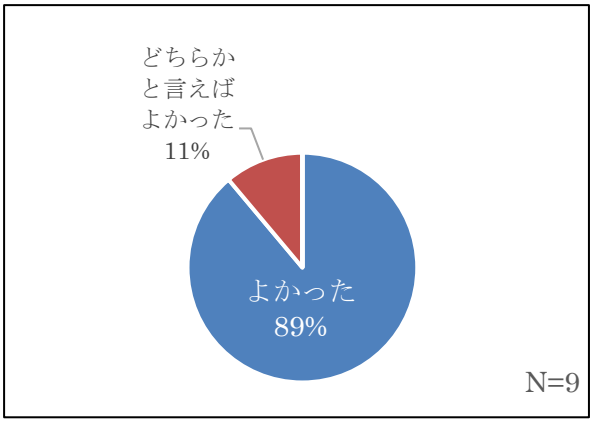
問 3．参加された動機をお聞かせください。(複数回答可)

テーマ，行先に関心があった	9 人
高崎のことは何でも知っておきたい	2 人
高崎学検定の受験を考えている	1 人
高崎経済大学が主催する行事だから	4 人
友人・知人に誘われたから	0 人
そのほか	0 人
無回答	0 人



問４．参加された感想をお聞かせください。

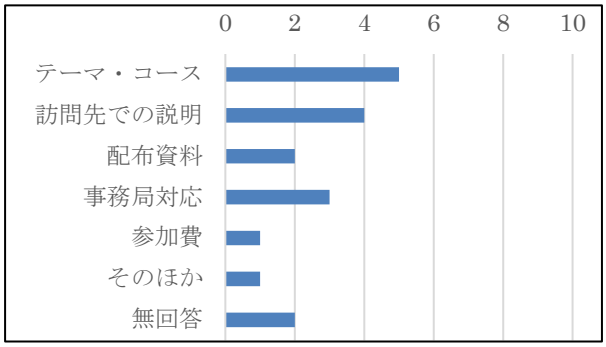
よかった	8 人
どちらかと言えばよかった	1 人
どちらとも言えない	0 人
どちらかと言えばよくなかった	0 人
よくなかった	0 人
無回答	0 人
合計	9 人



問５．問４の質問において「よかった」「どちらかと言えばよかった」と回答した方のよかった点。

(複数回答可)

テーマ・コース	5 人
訪問先での説明	4 人
配付資料	2 人
事務局対応	3 人
参加費	1 人
そのほか	1 人
無回答	2 人



【ご意見】（抜粋）

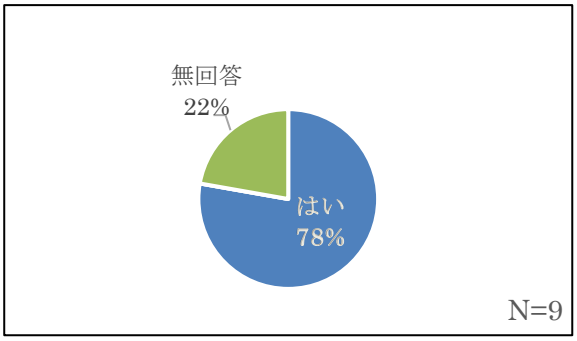
・研究されているテーマを手際よく説明していただいて大変参考になった。
・講演者の視点が新鮮。歩き見るのが良い。講演は短く
・資料が充実し説明が分かり易く,歩くコースも適当な距離でした。
・五万石騒動を知るにあたり知識を得る。

問６．問４の質問において「どちらかと言えばよくなかった」　「よくなかった」と回答した方のよくなかった点。

アンケート回答なし

問 7．地域めぐりに，また参加したいと思われますか。

はい	7 人
いいえ	0 人
無回答	2 人
合計	9 人



※どのようなテーマやコースの地域めぐりに参加したいですか。
　ご希望があれば教えてください（抜粋）

・今回は特に良かった。名所・旧跡などのテーマをお願いしたい。
・小栗上野介（大盛の関係、何故庄屋は裏切り,その後どうしたか）
・身近な高崎に関する歴史。

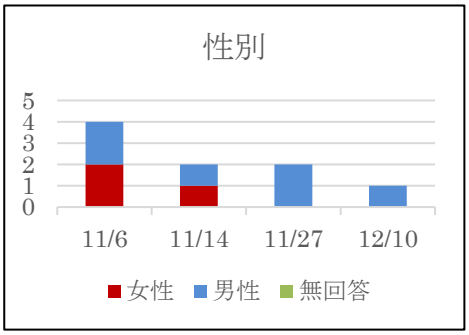
《第４回市民ゼミ》

○各回のゼミ終了後，アンケートを配付し，後日返送により回収。
　［有効回答数：９人（回収率：81.82%）］

問 1．ご自身についてお答えください。

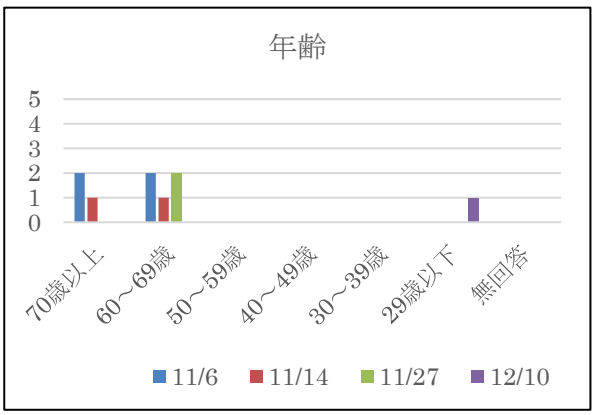
【性別】

	11/6	11/14	11/27	12/10
女性	2 人	1 人	0 人	0 人
男性	2 人	1 人	2 人	1 人
合計	4 人	2 人	2 人	1 人



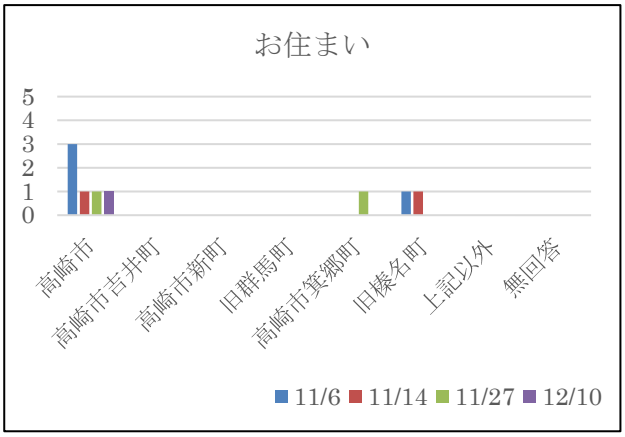
【年齢】

70 歳以上	2 人	1 人	0 人	0 人
60～69 歳	2 人	1 人	2 人	0 人
50～59 歳	0 人	0 人	0 人	0 人
40～49 歳	0 人	0 人	0 人	0 人
30～39 歳	0 人	0 人	0 人	0 人
29 歳以下	0 人	0 人	0 人	1 人
無回答	0 人	0 人	0 人	0 人
合計	2 人	2 人	2 人	1 人



【お住まい】

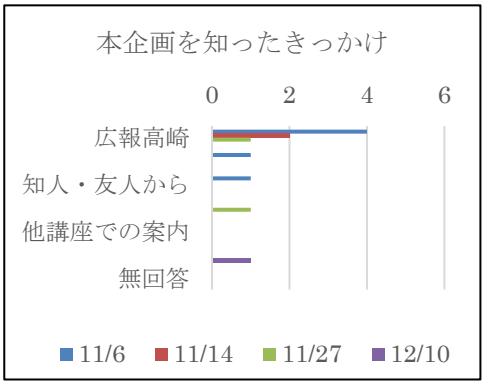
高崎市	3 人	1 人	1 人	1 人
高崎市吉井町	0 人	0 人	0 人	0 人
高崎市新町	0 人	0 人	0 人	0 人
旧群馬町	0 人	0 人	0 人	0 人
高崎市箕郷町	0 人	0 人	1 人	0 人
旧榛名町	1 人	1 人	0 人	0 人
上記以外	0 人	0 人	0 人	0 人
無回答	0 人	0 人	0 人	0 人
合計	4 人	2 人	2 人	1 人



問 2．本企画をどこでお知りになりましたか。(複数回答可)

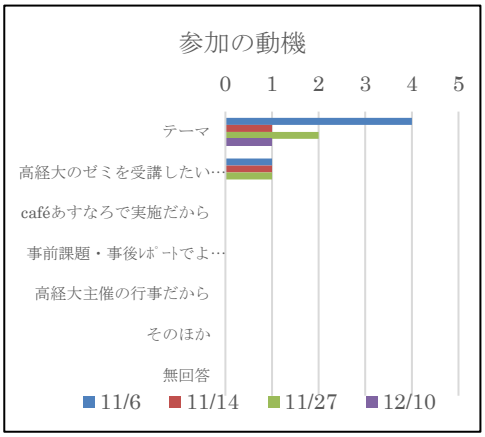
広報高崎	4 人	2 人	1 人	0 人
大学のホームページ	1 人	0 人	0 人	0 人
知人・友人から	1 人	0 人	0 人	0 人
本研究所からのメール	0 人	0 人	1 人	0 人
他講座での案内	0 人	0 人	0 人	0 人
そのほか	0 人	0 人	0 人	1 人
無回答	0 人	0 人	0 人	0 人

※そのほか……本学教員より



問 3．受講された動機をお聞かせください。(複数回答可)

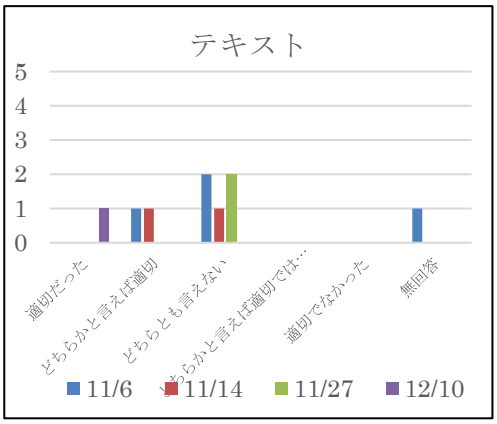
テーマに関心があった	4 人	1 人	2 人	1 人
高崎経済大学のゼミを受講したい	1 人	1 人	0 人	0 人
cafe あすなろで実施するから	0 人	0 人	0 人	0 人
事前課題や事後レポートでより深く学べるから	0 人	0 人	0 人	0 人
高崎経済大学主催だから	0 人	0 人	0 人	0 人
そのほか	0 人	0 人	0 人	0 人



問４．受講された感想をお聞かせください。

【テキストは適切でしたか】

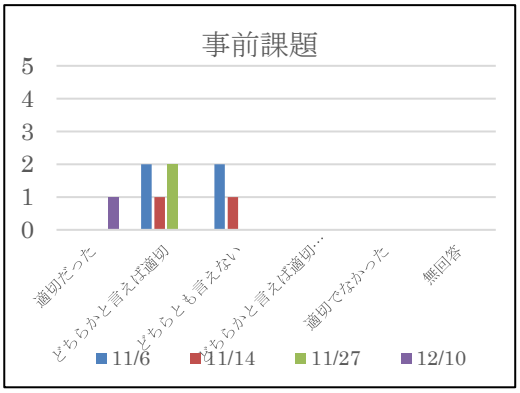
適切だった	０人	０人	０人	１人
どちらかと言えば適切	１人	１人	０人	０人
どちらとも言えない	２人	１人	２人	０人
どちらかと言えば適切でない	０人	０人	０人	０人
適切ではなかった	０人	０人	０人	０人
無回答	１人	０人	０人	０人
合計	４人	２人	２人	１人



・講義内容とテキストの関係から事前にテキスト選定理由があれば良いと思います
・神道とは何か。難解でしたが面白かったです。
・本を読んでからのゼミに入るので大変でした。
・著名な学者だが,やや高齢で時代認識が新しくないという感じがした。
・日本の人口減少を考察するのであれば,もっと適切なテキストがあるのではないか

【受講前の課題は適切でしたか】

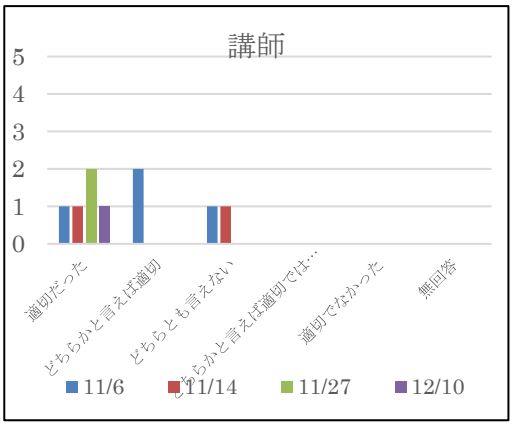
適切だった	１人	０人	０人	１人
どちらかと言えば適切	３人	１人	０人	０人
どちらとも言えない	１人	１人	２人	０人
どちらかと言えば適切でない	０人	０人	０人	０人
適切ではなかった	０人	０人	０人	０人
無回答	０人	０人	０人	０人
合計	５人	２人	２人	１人



・噛み砕いたテキストを送って欲しかった。
・テキストの本を読んで感想、意見を把握して来いと書かれていたが、確かにそれが分で出来れば先生はいらないで自習で良いと思います。
・ゼミの目的が「日本人の宗教観」であるのならば,もっと仏教からのアプローチを重視すべき。

【担当講師のゼミ授業は適切でしたか】

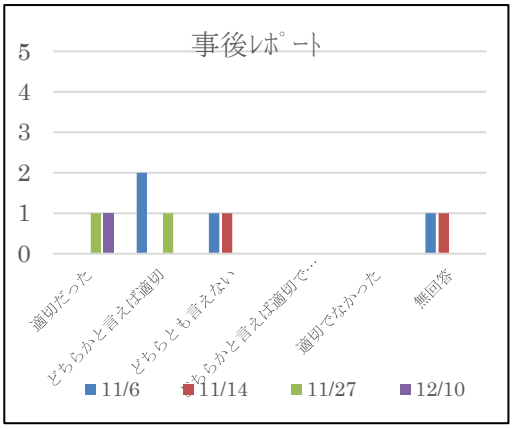
適切だった	1 人	1 人	2 人	1 人
どちらかと言えば適切	2 人	0 人	0 人	0 人
どちらとも言えない	1 人	1 人	0 人	0 人
どちらかと言えば適切でない	0 人	0 人	0 人	0 人
適切ではなかった	0 人	0 人	0 人	0 人
無回答	0 人	0 人	0 人	0 人
合計	4 人	2 人	2 人	1 人



・テーマが重く、難しかったのかもしれません。
・受講者のレベルに合わせての内容だった。
・受講者の質問に答えるより,教授の話を一本のストーリーにして中心に据えた方が良いと思う。

【事後レポートの課題は適切でしたか】

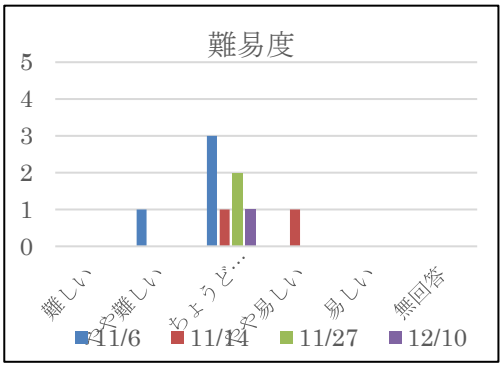
適切だった	0 人	0 人	1 人	1 人
どちらかと言えば適切	2 人	0 人	1 人	0 人
どちらとも言えない	1 人	1 人	0 人	0 人
どちらかと言えば適切でない	0 人	0 人	0 人	0 人
適切ではなかった	0 人	0 人	0 人	0 人
無回答	1 人	1 人	0 人	0 人
合計	4 人	2 人	2 人	1 人



・事後レポートの課題があるのは、それっきりということでなく大切な事です。

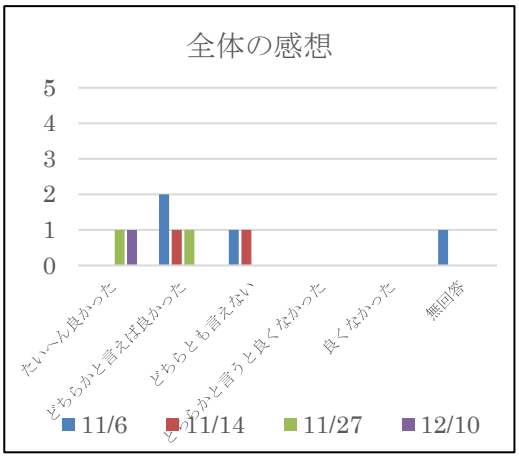
問５．受講された市民ゼミナールの難易度についてお聞かせください。

難しい	0 人	0 人	0 人	0 人
やや難しい	1 人	0 人	0 人	0 人
ちょうどよい	3 人	1 人	2 人	1 人
やや易しい	0 人	1 人	0 人	0 人
易しい	0 人	0 人	0 人	0 人
無回答	0 人	0 人	0 人	0 人
合計	4 人	2 人	2 人	1 人



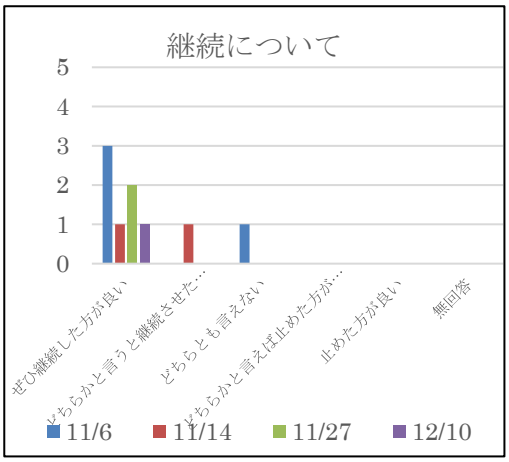
問６．受講を終えられて，市民ゼミナール全体の感想をお聞かせください。

たいへん良かった	０人	０人	１人	１人
どちらかと言えば良かった	２人	１人	１人	０人
どちらとも言えない	１人	１人	０人	０人
どちらかと言えば良くなかった	０人	０人	０人	０人
良くなかった	０人	０人	０人	０人
無回答	１人	０人	０人	０人
合計	４人	２人	２人	１人



問７．この市民ゼミナールは今後も継続した方がよろしいでしょうか。

ぜひ継続したほうが良い	３人	１人	２人	１人
どちらかと言うと継続させたほうが良い	０人	１人	０人	０人
どちらとも言えない	１人	１人	０人	０人
どちらかと言えば止めた方が良い	０人	０人	０人	０人
止めた方が良い	０人	０人	０人	０人
無回答	０人	０人	０人	０人
合計	４人	２人	２人	１人



問８．市民ゼミナールで取り上げると良いと考えられるテーマがありましたら，教えて下さい。

・市民講座との違いを考える
・経済大学なのだから,もっと現状の経済の話。
・現代病ともいえる精神疾患に関する問題点を掘り下げて下さい。
・歴史や考古学・民俗学関係のもの。
・平成 30 年間の振り返り。この間に世界に於ける日本の位置づけはどう変化したのか。
・シュンペーター,ピーター・ティール

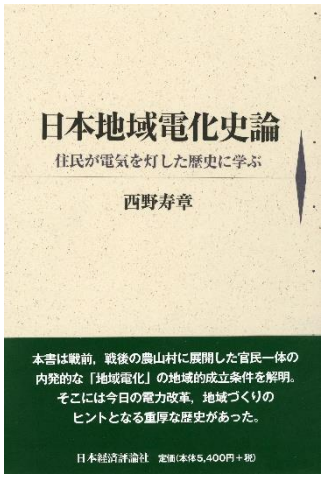
問 9．高崎経済大学の市民向け事業全般について，ご意見がありましたら，お聞かせ下さい。

・市民,学生相互の活性化で実施時間等を工夫して学生の参加もあった方が良いのでは。
・2 時間という限られた時間でしたが,今後を学んでいくべきという動機を与えられました。
・受講者のレベルや問題意識のバラツキもあり,また 1 つの質問に簡潔な答えで良いところを,異常に長く話す方もいて,自分としては十分な発言とならなかった点が心残りです
・学生とスポーツを通してご一緒出来たら楽しいと思います。
・受講者の意識レベルがもう少し合っていると良いと思いました。
・市民に開かれた大学だと思います。

所員刊行図書案内

西野　寿章所長（地域政策学部教授）

『日本地域電化史論―住民が電気を灯した歴史に学ぶ―』，日本経済評論社，324p，2020 年，5,400 円＋税



2011 年 3 月の巨大地震に伴う東京電力福島第一原子力発電所の放射能放出事故の発生によって，原発の安全神話が崩れ，電力会社の信頼性を失うことになった。放射能は，事故発生時の風向きによって原発の北西部に流れ，帰還困難区域では全住民が避難を余儀なくされた。一方，原発の南西部方向にも放射能が拡散し，筆者の勤務校のある群馬県にも放射能が達し，碓氷峠を越えて長野県軽井沢町にも達した。群馬県では，冬の風物詩である榛名湖のワカサギの持ち帰りが 2018 年 1 月まで禁止され，2019 年 9 月の群馬県の調査結果によれば，依然として，基準値を超えて被爆しているイノシシ，ツキノワグマが確認されている。

原発事故によって，戦後はじめて，日本の電気事業のあり方が問われ，太陽光発電を主とした再生可能エネルギーの本格的普及の契機ともなった。政府も固定価格買取制度を制定して，その普及を図った。事故後，学界では多様な分野において原発の是非をめぐる議論が展開され，新聞社では脱原発，原発推進の立場を鮮明に打ち出した論評が繰り広げられてきた。

日本のエネルギーシステムを考える際，福島原発事故後，脱原発を決めたドイツの都市，農村におけるエネルギー政策や協同組合の取り組みは参考になることが多い。ヨーロッパでは，国境を越えて送電線網が構築されていることから，託送方式によって国境を越えて電力の購入が可能となっている。こうした仕組みによって，チェルノブイリ原発事故後，脱原発をめざし，自然エネルギーだけを供給する電力会社が山村に誕生し，話題となってきた。都市部に住む国民から支持され，自社発電量を遙かに上回る電力を輸入して供給している。

日本では，事故後，首相経験者，首長経験者の中から脱原発を目指す動きも出てきた。政府のエネルギー計画では，再生可能エネルギーの普及をめざすものの，原発をベースロード電源として位置づけ，そうした計画の是非についても活発な議論が行われた。しかし，時間の経過とともに，議

論は沈静化してきたように感じる。

筆者は長年にわたって，戦前の日本の主に山村に展開していた町村営電気事業と電気利用組合が成立した地域的条件の解明に取り組んできた。自主財源の乏しかった戦前の山村において，どのようにして電灯を灯したのか，この疑問を解いてきた。後発の町村営電気の中には起債を財源としたケースもあったが，早期に設立された地域では，経済性に優れた町村有林や集落の共有林，住民の寄付が財源の全部，あるいは一部となっていたケースがあった。また，村営電気の設立について村民大会を開催したケースも見られた。こうして設立された町村営電気事業の利益は自主財源となって脆弱な財政を補完し，住民が出資した電気利用組合では，規模によっては配当を実現していた。戦前の農村社会は不平等な社会ではあったが，筆者が調査した事例では，地域電化のための指定寄付金は所得や財産規模に応じて算定されていた。小作層にとっては重税だった可能性があり，検討の必要性が残されているが，地主層は高額寄付者であった。

戦前の電気事業は，自由放任の下に発達したことから，電灯会社の配電区域に組み入れられなかった地域では，財源さえ確保できれば地域で電化を図ることが可能であり，かつ小規模でも経営も成り立ち，住民と行政が一体となって社会資本が整備され，エネルギーコミュニティが形成されていた。住民は電気事業経営に高い関心を向けていた。近年，「新たな公共」の必要性が指摘されているが，戦前の山村社会にすでに存在し，官民一体の分散型再生可能エネルギーシステムが構築されていた。これは，地域ガバナンスの一つの型と捉えることもできる。しかし，1938 年の電力管理法，1941 年の配電統制令によって消滅させられた。

よく言われる「エネルギー問題の国民的議論」は，現状では議論できる場所はどこにもない。それは，戦前の山村のように地域電化を官民で実現して，エネルギーコミュニティが形成されてこそ可能となるのではないだろうか。1947 年に福島県が先導して推進した配電県営化運動が実現していたならば，県単位にエネルギーコミュニティが形成され，今とは異なった地方自治の姿が形成されていたかも知れないと思うことがある。戦前の山村には，今日の電力改革のヒントとなる重厚な地域電化の歴史があった。

研究プロジェクト新刊案内

『農業用水と地域再生　高崎市・長野堰の事例』，日本経済評論社，172p，2021 年，3,400 円＋税

2020 年度の地域科学研究所の研究プロジェクト研究成果は，旧高崎市内を貫流している農業用水である長野堰の通史『農業用水と地域再生－高崎市・長野堰の事例』(日本経済評論社)です。地域科学研究所が長野堰について研究を行おうとした動機は，第一には長野堰の起源，すなわち開削者や開削時期には多くの説があり，一定の結論を得ていないことにありました。歴史学研究、考古学研究，また農業土木学などの長野堰の起源に関する見解は，実に多様であり，長野堰に関わる公的機関のホームページの説明もまた，多様だからです。なぜ，多様な見解が存在するのか、その要因を探りながら，長野堰の起源を明らかにしよ

うとしました。第二には，長野堰の歴史に関する文献は，1904 年当時，長野堰の管理を行っていた群馬県群馬郡役所の役人であった新井馬吉がまとめた『長野堰史』しか存在しておらず，高崎市の歴史研究の一つとして，長野堰の通史をまとめておく必要を感じたからでもありました。そして，第三には，明らかになった通史に，現代高崎の地域的課題を解決改善する地域政策的思考を高めるヒントがないかを探ることにありました。

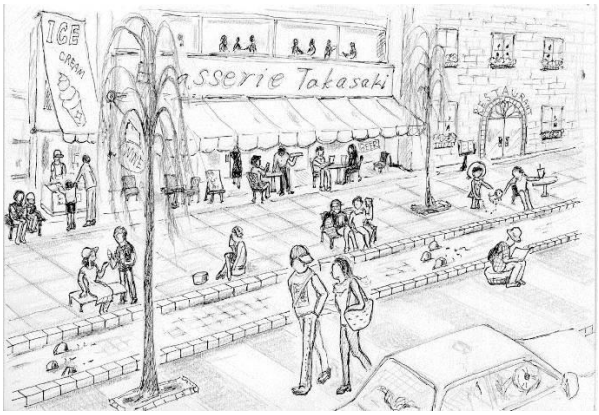
本書は，歴史に留めず，これからの高崎市の地域づくりにも論及しています。いつ頃までだったかは明確ではありませんが，戦後の一定時期まで高崎中心市街地にも長野堰から分水された幾本かの用水路がありました。自動車の普及によって幅員を広げるために，高崎中心市街地を流れていた用水路は暗渠化されました。

市街地に用水路が流れる例は，日本でも城下町に見られますが，海外においても防火用水路として流れている例を見ることができます。いわゆるコンパクトシティのモデルとされるドイツの環境首都・フライブルグ市の中心市街地には、13 世紀に建設された防火用水路が復元され，水辺空間を演出しています。

<フライブルグ市の市街地を流れるベッヒェレ>

撮影：西野寿章

フライブルグ市の復元された防火用水路はベッヒェレ(小川)と呼ばれている。このベッヒェレも、一端は暗渠化されたものの，1960 年代後半から始まった自動車を排除したトランジットモール形成の過程で復元されています。本書では、このフライブルグ市のまちづくりにヒントを得て，高崎中心市街地に長野堰を復元して，市民が憩える水辺空間の形成を提案しています。



<高崎中心市街地に復活した長野堰の予想図>

作画：中村真由美

ドイツの都市には，地域の社会資本を維持するための財政的な仕組みがあります。シュタットベルケ(都市公社)と呼ばれています。環境首都の町づくりの主役は路面電車です(写真)。日本にも多くの都市に路面電車がありましたが，赤字を理由に相次いで廃止され，自動車とバスから排出される二酸化炭素(CO2)に悩まされる時期がありました。ドイツの都市を走る路面電車も赤字と聞きます。それでも，路面電車は走り続け，路線拡張が続いています。フライブルグ市の人口は，旧高崎市と同じ 24 万人です。どのようにして路面電車を存続させているのでしょうか。それがシュタットベルケなのです。多くの都市のシュタットベルケは，市民が毎日利用する電気，ガス，水道を供給する一方，下水処理，ゴミ収集と処分を行っています。これらの部門は概して黒字となっており，ここで生まれた黒字を路面電車の赤字に補填しているのです。市民が生活する中で，環境首都の主役である路面電車を維持しているのです。

今後，人口減少が予想される高崎市においても，ドイツのシュタットベルケを研究し，住民福祉に必要な財源を自ら生み出し，官民一体となっ

た町づくりが検討されてもよいと思われます。自由化が進んで，日本でもシュタットベルケ的取り組みが可能となっています。実際に，宮崎県延岡市では市営地域電力を設立して，財源確保をめざそうとしています。高崎市にもシュタットベルケが誕生すれば，そこで生み出されたお金を何に使えば良いのか，それを官民で考え，居心地のよい町づくりを進めることが考えられます。

今後，要介護の増加が見込まれていますが，介護現場は重労働の割には賃金が安いことから人手が集まりにくいと言われています。例えば，国で定められている介護現場で働く人々の賃金に，高崎市独自に上乗せすれば，介護人材の確保を図ることができるかも知れません。地域独自の教育や産業振興を図ることも可能となるかも知れません。市民が生活を営む中で地域独自の財源を生み出すシュタットベルケ方式は，人口減少時代を迎えた日本の地域が独自の地域づくりを進めるためのヒントを与えてくれています。

『農業用水と地域再生』では，こうした議論を展開しています。高崎市立図書館，群馬県立図書館などで『農業用水と地域再生』を実際に手に取って一読いただければ幸いです。なお，「農業用水と地域再生』の収録内容の内、明治期から現代に至る高崎市の変化と長野堰については，高崎経済大学ブックレット⑤「明治以降の長野堰と高崎―これからの地域づくりへの視点を考える―」としてもまとめています。

西野　寿章所長（地域政策学部教授）

【目次】

序　章　本書の視点＜西野寿章＞
第一章　長野堰を必要とした高崎台地の地質的特性＜青山雅史＞
第二章　長野堰の概要と開削の伝承
第一節　長野堰土地改良区の概要＜西野寿章＞
第二節　長野堰と長野氏＜鈴木耕太郎＞
第三節　「長野堰史」現代語訳および解説＜鈴木耕太郎＞
第四節　「伝承」の検証＜西野寿章,鈴木耕太郎＞
第三章　近世における西新波堰流域村の米作条件と堰の管理システム＜西野寿章＞
第四章　戦前の長野堰と地域生活
第一節　明治期から昭和初期までの利水域人口＜佐藤英人＞
第二節　長野堰運営組織の近代化と経営＜西野寿章＞
第三節　生活様式としての長野堰＜西野寿章＞
第四節　染色業の展開と長野堰＜西野寿章＞
第五章　戦後における高崎市の変容と長野堰＜西野寿章＞
終　章　現代高崎の地域的課題と地域史を活かしたまちづくり
第一節　長野堰の歴史と地域づくりへの視点＜西野寿章＞
第二節　観光資源としての水辺景観の有効性＜太田慧＞
第三節　市街地を流れた長野堰の復元と地域資本整備手法の考察＜西野寿章＞

地域科学研究所動静

・ブックレット第４号『高崎の商業発達史』，第５号『明治以降の長野堰と高崎―これからの地域づくりへの視点を考える―』を発行しました。近日中に，本学ホームページで公開するとともに，市役所１階及び本学図書館にて，無償配布をする予定です。

・地域科学研究所紀要「産業研究」第５６巻第２号を発行しました。今号では，論文１本，地域経済レポート１編，所蔵会社史・団体史目録及び解説を掲載しました。本学ホームページ（リポジトリ）よりご覧頂けます。

編集後記

今年度は，新型コロナウイルスに翻弄された 1 年となりました。春先は年間を通してイベントの開催自体難しいと思われましたが，秋以降に定員の半減や手指消毒等の感染症対策を行ない，無事に開催する事ができました。

これもひとえに関係各位の多大なるご尽力と，ご参加くださった皆様の学びに対する熱意によるものであると感じております。来年度も未だ先を見通せない状況ではありますが，皆様に学びの場をご提供できるよう，事務局一同準備を進めて参ります。

私事で恐縮ですが，5 年間の派遣期間が終了し，4 月から高崎市へ戻ることになりました。大学事務は初めての経験で，最初は戸惑う事もありましたが，無事乗り切ることができました。携わってくださった全ての方に，この場を借りて御礼申し上げます。（SK）

高崎経済大学地域科学研究所
ニューズレター　No.15
発　行 2021 年 3 月 31 日
群馬県高崎市上並榎町 1300(〒370-0801)
TEL(027)344-6267　FAX(027)343-7103
E-mail：chiikikagaku@tcue.ac.jp
©TIRS